

阿宮地区経営体育成基盤整備事業に伴う  
上阿宮Ⅰ遺跡・上阿宮Ⅲ遺跡発掘調査報告書

2005年3月

斐川町教育委員会

あぐ  
阿宮地区経営体育成基盤整備事業に伴う  
かみあぐ  
上阿宮Ⅰ遺跡・上阿宮Ⅲ遺跡発掘調査報告書



島根県斐川町の位置

2005年3月

ひかわちょう  
斐川町教育委員会

# 序

古代の阿宮は『出雲国風土記』に「斐伊大河、此の郷の中を北に流る。故、河内と云う。」と書かれ、この地域を「河内郷」と呼んでいました。斐伊川の中洲に集落が点在する景観が目に浮かび、今とは全く違った地形や環境を想像することができます。

阿宮地区は大規模な道路宅地開発や農業基盤整備が進行中であります。このたび実施しました発掘調査において地区内でははじめて古代から近世にかかる遺跡を発見することができました。今まで環境が一変しようとしている阿宮地区において、この遺跡の発見は大変貴重で、古を知り今に生かすきっかけになればと願っています。

本書では上阿宮Ⅰ遺跡と上阿宮Ⅲ遺跡の調査概要を収録しました。本書が多くの方の手にわたり、埋蔵文化財保護に対する理解と関心が高まり、阿宮の歴史学習の手助けになれば幸いです。

最後に、調査にご協力いただいた地元の皆様、島根県出雲農林振興センターはじめ、関係各位の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成17（2005）年3月

斐川町教育委員会

教育長 古川君和

## 例　言

1. 本書は、斐川町教育委員会が平成16年度に実施した阿宮地区経営体育成基整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査を実施した遺跡は次のとおりである。

上阿宮Ⅰ遺跡　島根県簸川郡斐川町大字阿宮384番地2他

上阿宮Ⅲ遺跡　島根県簸川郡斐川町大字阿宮262番地1他

3. 調査組織及び期間は次のとおりである。

### [組織]

調査指導　島根県教育委員会

調査主体　斐川町教育委員会

事務局　陰山 昇（文化財課長）、原 賢二（同 副主任）

調査員　宍道年弘（文化財課係長）

### [期間]

平成16年6月3日～平成17年3月10日

4. 現地調査及び資料整理に際しては、下記の方々にご助言、ご協力いただいた。（順不同・敬称略）

関 和彦（共立女子第二中学高等学校）、西尾克己（島根県教育庁文化財課）、東森 晋（同）、平石 充（島根県古代文化センター）、池田敏雄（斐川町文化財保護審議会委員）、石川 功、江角 健（斐川町教委員会文化財課）、前田みのり（同）、江角美恵子（同）、露梨靖子（同）

5. 発掘調査にあたっては、次の方々に従事していただいた。（順不同・敬称略）

池田陽子、星野正巳、三加茂愛子、三加茂重義、山田幸子、渡部延雄、勝田光久、金山次夫、黒田一三子、佐藤倭和子、呂子滝市、高橋義政、母 清、原 清視、中間盛大、加藤秀樹、清水 作、山根利江、渡部怜美

6. 本書で使用した挿図の方位は磁北であり、レベル高は海拔である。

7. 第2図は国土交通省国土地理院発行のものを使用した。

8. 柱根の樹種同定は、文化財調査コンサルタント㈱に分析を委託し、また本書に玉稿を賜った。

9. 本書で使用した遺構記号は以下のとおりである。

SB：掘立柱建物、SA：柵列状遺構、SD：溝状遺構、P：柱穴、T：柱根

10. 本書の執筆・遺物実測・校正等の報告書作成業は宍道が行なった。

11. 本書に報告した出土遺物、実測図、写真等は、斐川町教育委員会で保管している。

# 目 次

序

例 言

日 次

挿図目次・表目次・図版目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と環境	3
第3章 上阿宮I遺跡の調査	4
第1節 遺跡の位置	4
第2節 第1調査区の概要	6
第3節 第2調査区の概要	6
第4節 まとめ	6
第4章 上阿宮II遺跡の調査	7
第1節 遺跡の位置	7
第2節 第1調査区の概要	7
第3節 第2調査区の概要	11
1. 検出遺構	11
2. 出土遺物	19
第4節 範囲確認調査	24
第5節 まとめ	25
出土遺物観察表	
第5章 上阿宮III遺跡発掘調査に伴う出土柱の樹種	(渡辺正巳・古野 裕) 28

## 挿図目次

第1図 上阿宮I遺跡・上阿宮III遺跡調査位置図 (1:3,000)	2
第2図 上阿宮I遺跡・上阿宮III遺跡と周辺の主な遺跡	3
第3図 上阿宮I遺跡第1・第2調査区位置図	5
第4図 上阿宮I遺跡第1・第2調査区配置図	5
第5図 上阿宮I遺跡第1・第2調査区断面図 (1:80)	6
第6図 上阿宮III遺跡第1・第2調査区位置図	7
第7図 上阿宮III遺跡第1調査区配置図	8
第8図 上阿宮III遺跡第2調査区 (A~C地点) 配置図	8
第9図 上阿宮III遺跡第2調査区構造配置図 (1:80)	9~10
第10図 上阿宮III遺跡第1・第2調査区断面図 (1:80)	11
第11図 SB01実測図 (1:60)	12
第12図 SB01・P3出土遺物実測図 (1:3)	12
第13図 SB01・P4出土遺物実測図 (1:3)	13
第14図 SB02実測図 (1:60)	13
第15図 SB03実測図 (1:60)	14
第16図 SB04実測図 (1:60)	14
第17図 SB05実測図 (1:60)	15
第18図 SB05・P3出土遺物実測図 (1:3)	15
第19図 SA01実測図 (1:60)	16
第20図 SA02実測図 (1:60)	16
第21図 SA03実測図 (1:60)	16
第22図 SD01実測図 (構造1:60、断面1:40)	17
第23図 SD02・SD03・SD04実測図 (構造1:60、断面1:40)	17
第24図 SD05・SD06実測図 (構造1:60、断面1:40)	18
第25図 SD06出土遺物実測図 (1:3)	18
第26図 構造に伴う出土遺物実測図 1 (1:3)	19
第27図 構造に伴う出土遺物実測図 2 (1:3)	20
第28図 構造に伴わない出土遺物実測図 (1:3)	21
第29図 出土柱根実測図 (1:20)	22
第30図 A~C地点東壁土層図 (1:80)	24

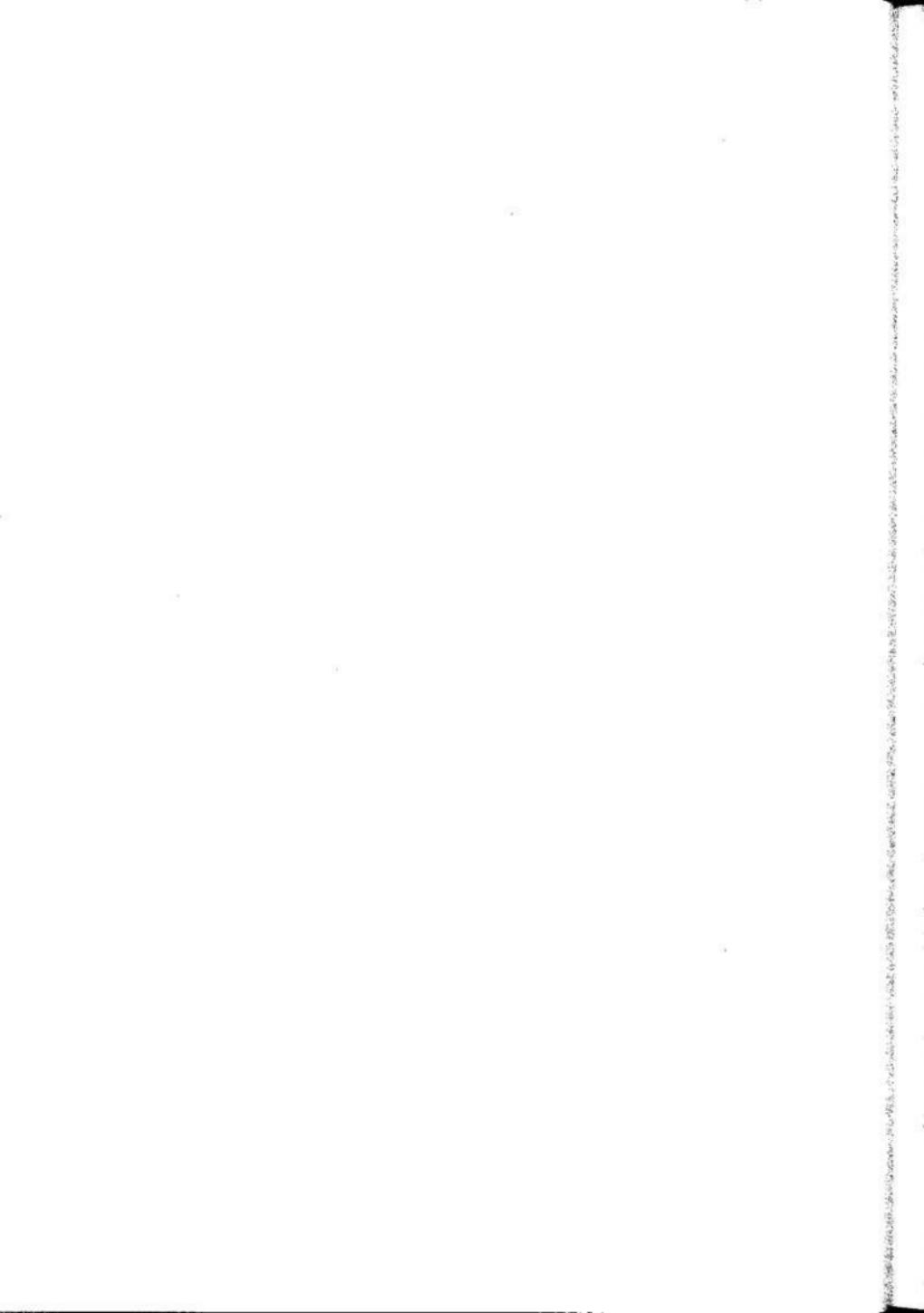
## 表 目 次

表1	出土遺物一覧表（図示し得ない柱穴出土遺物）	23
表2	出土柱根一覧表	23
表3	出土遺物（土器）観察表	26
表4	出土遺物（陶磁器）観察表	27
表5	出土遺物（石製品）観察表	27
表6	出土遺物（木製品）観察表	27

## 図版目次

上阿宮Ⅲ遺跡 遠景（遠方は城平山）

- 図版1 上阿宮Ⅰ遺跡第1調査区 調査前全景（西より）、完掘状況（南より）、上阿宮Ⅰ遺跡第2調査区 調査前全景（東より）
- 図版2 完掘状況（南より）、上阿宮Ⅲ遺跡第1調査区 調査前全景（西より）、完掘状況（西より）
- 図版3 上阿宮Ⅲ遺跡第2調査区 完掘状況
- 図版4 遺構検出状況（西より）、遺構検出状況（東より）
- 図版5 SB01、SB02完掘状況、SB04完掘状況、SB05完掘状況
- 図版6 SB01・P2柱穴断面、SB01・P4柱穴礎板検出状況、SB03・P2柱穴礎板検出状況
- 図版7 SB05・P2柱穴完掘状況、T15・T16柱根完掘状況、SD06遺物出土状況
- 図版8 SA01完掘状況、SA02完掘状況、SA03検出状況
- 図版9 SD01完掘状況、SD02～SD04完掘状況、SD05完掘状況、SD06完掘状況
- 図版10 T1～T3、T3底部、T4～T7、T7底部
- 図版11 T8、T10、T10底部、T11～T16
- 図版12 SB01・P3出土遺物、SB01・P4出土遺物、SD06出土遺物
- 図版13 遺構に伴う出土遺物①、遺構に伴う出土遺物②、遺構に伴う出土遺物③
- 図版14 遺構に伴う出土遺物④、遺構に伴う出土遺物⑤、遺構に伴う出土遺物⑥
- 図版15 遺構に伴う出土遺物⑦、遺構に伴う出土遺物⑧、遺構に伴わない出土遺物①
- 図版16 遺構に伴わない出土遺物②、遺構に伴わない出土遺物③、遺構に伴わない出土遺物④
- 図版17 SB01・P4出土遺物、SB01・P4出土遺物
- 図版18 A地点 完掘状況（南から）、B地点 完掘状況（南から）、C地点 完掘状況（西から）



## 第1章 調査に至る経緯

島根県出雲農林振興センターは阿宮地区経営体育成基盤整備事業の工場整備実施区域内において、埋蔵文化財調査を実施するよう平成16年5月13日付け文書で斐川町教育委員会に依頼した。これを受けて町教育委員会はすでに計画地内には遺跡地図<sup>(1)</sup>及び過去に行なった分布調査<sup>(2)</sup>により上阿宮Ⅰ遺跡などの周知の遺跡が確認されていることから、開発にあたっては「文化財保護法に基づき遺跡の発掘調査が必要である」旨を同年5月19日付け文書で回答した。両者協議の結果、調査期間は同年6月3日から11月30日まで、調査箇所は耕作道路部分（舗装敷）について遺跡範囲確認のための試掘調査を4ヶ所行なうことで合意した。

調査は上阿宮Ⅰ遺跡地内に1区、2区、遺跡が存在する可能性のある阿吾神社西側に3区、4区を設定し、それぞれ4×4mの試掘坑を重機により掘削することにした。調査の結果、1区～3区では明確に遺構遺物を確認することができなかつたが、4区では小ピットや若干の遺物を検出したので、町教育委員会は直ちに島根県教育委員会文化財課に事情を報告し調査指導を受けた。指導内容は4区においては道路敷部分の全面調査、4区周辺の追加調査による遺跡範囲の確認、4区周辺に新たに遺跡名を付け「遺跡発見届」を提出することなどであった。

町教育委員会は県文化財課の指導を踏まえ、県出雲農林振興センターに試掘調査の結果とともに今後の取扱いについて9月1日付けで協議を行なった。協議により4区周辺を継続して本調査を行なうこと、調査期間と経費について変更契約を行ない、平成17年3月までに報告書作成を含め事業を完了することで合意した。

これにより町教育委員会は4区周辺を「上阿宮Ⅲ遺跡」と命名し、本調査及び周辺の範囲確認調査を11月上旬まで行い、その後、報告書作成作業に入った。

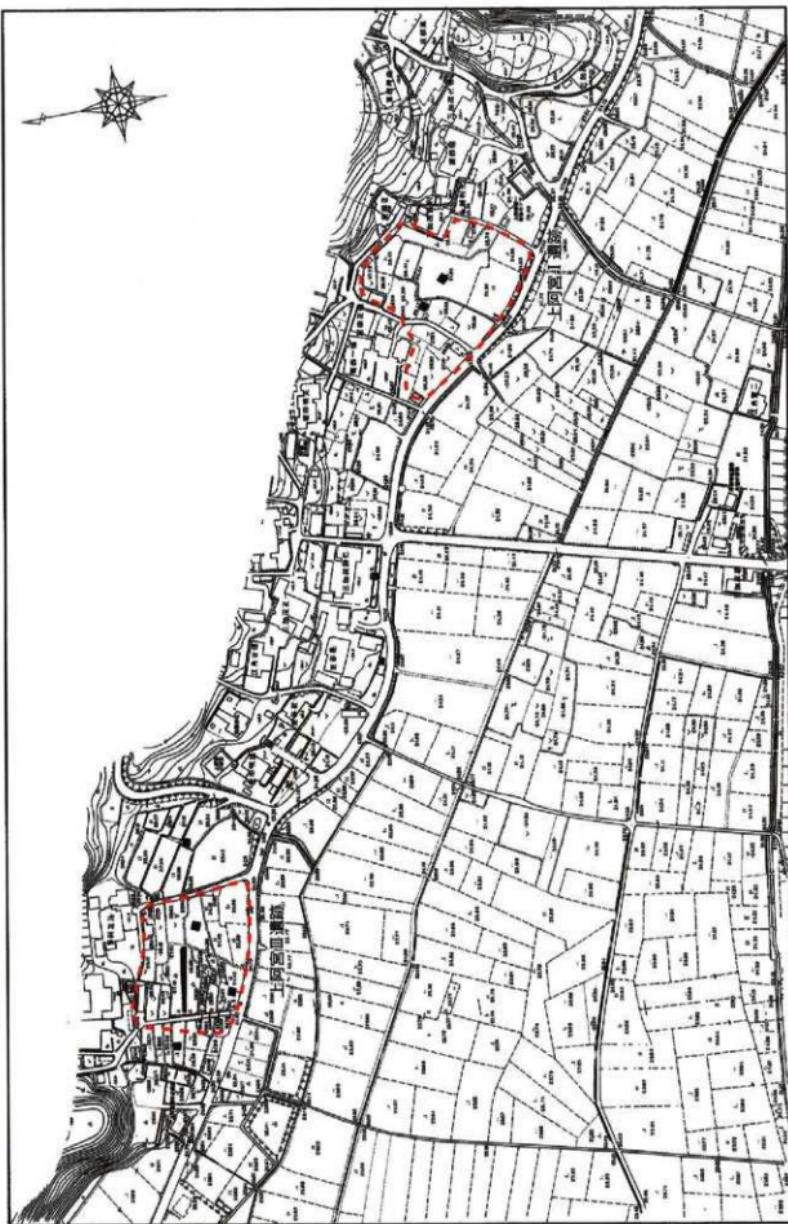
調査時の調査区名を本書では以下のとおり変更した。

上阿宮Ⅰ遺跡		上阿宮Ⅲ遺跡（阿吾神社西側）	
調査時	本書	調査時	本書
1区	第1調査区	3区	第1調査区
2区	第2調査区	4区	第2調査区

### （註）

- （1）『増補改訂 島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）』島根県教育委員会、1993年
- （2）『島根県斐川町遺跡分布調査報告書』斐川町教育委員会、1992年

第1図 上阿宮Ⅰ道路・上阿宮Ⅱ道路調査位置図 (1:3,000) (■は調査地点)

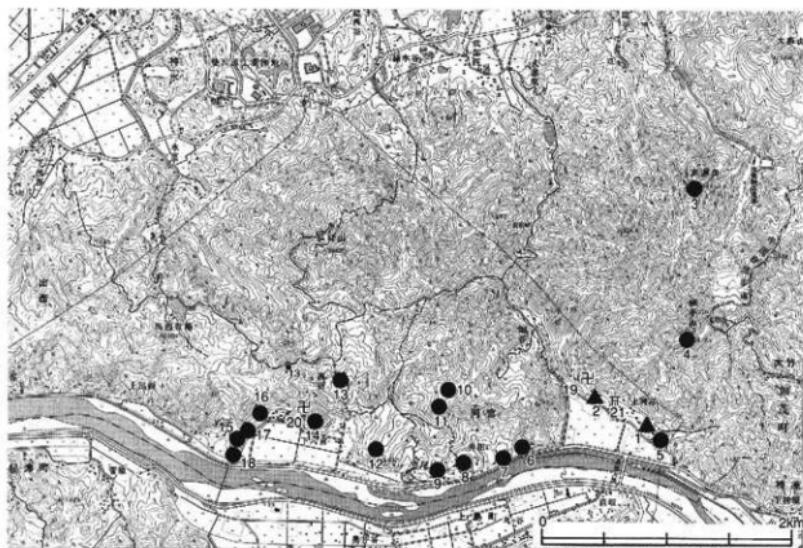


## 第2章 位置と環境

上阿宮（かみあぐ）I遺跡及び上阿宮III遺跡は出雲平野の南部に連なる丘陵の一つ、城平山（標高316.4m）の南西麓、畠谷川の左岸近くに所在し、北側の浅い谷あいからもたらされた土砂によって堆積した扇状地の上に立地している。遺跡の現状は水田で、南方500mには古代において「出雲大川」とよばれた斐伊川が東西に流れ、現在のような高い堤防のない近世以前までは、遺跡のすぐ傍まで川の流れがあったものと思われる。

阿宮地区においてこれまでに知られている遺跡は16ヶ所である。縄文・弥生時代の遺跡は発見されていないが、今後調査機会が増えれば発見される可能性は高いと思われる。

古墳時代になると丘陵斜面に数々の古墳が出現するようになる。石棺式石室を持つ古墳として知られる高野古墳群、布子谷古墳や水越古墳、横手古墳など小規模な古墳が散在している。とくに高野古墳群は下阿宮地内の高野地区に3基が集中して築かれており、1号墳は円墳で切石を用いた玄室が良く残されている。2・3号墳は隣接し墳丘の大半は削平され、わずかに玄室の石材が一部残されているにすぎない。



- 1 上阿宮I遺跡 2 上阿宮III遺跡 3 高瀬城跡 4 城平山城跡 5 上阿宮II遺跡 6 井田横穴群  
7 井田遺跡 8 墓田横穴群 9 阿宮公民館後古墳 10 天寺平廐寺 11 立栗山城跡 12 布子谷古墳  
13 高野古墳群 14 下阿宮古墳 15 下阿宮I遺跡 16 下阿宮II遺跡 17 横手古墳 18 岩海古墳  
19 圓通寺（6番札所） 20 全昌寺（7番札所） 21 阿吾神社（阿具社）

第2図 上阿宮I遺跡・上阿宮III遺跡と周辺の主な遺跡

古墳時代後期に築かれる横穴墓は井田横穴群と墓田横穴群が知られ、2～3基の小規模な横穴墓群である。

奈良～平安期にかかる遺跡としては、上阿宮Ⅰ遺跡のほか上阿宮Ⅱ遺跡、井田遺跡、下阿宮Ⅰ遺跡、下阿宮Ⅱ遺跡において須恵器や土師器、土師質土器、陶磁器が表探されている。これらの遺跡は標高30m以下で、斐伊川の堆積砂による沖積地から急峻な丘陵地に至るまでの比較的緩傾斜面に所在している。安定した生活ができる限られた範囲に人々は長期にわたって集落を営んでいたものと考えられる。

昭和61年に発見された天寺平廃寺は標高200mの高所に位置し、65×45mの平坦地に礎石を伴う2ヶ所の基壇と瓦溜りが存在している。南側基壇は塔跡、北側基壇は金堂（嚴堂）跡が想定されている。表探される瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、鬼瓦、埠が認められ、今でも膨大な量が現地に遺存している。瓦の文様から奈良時代後期から平安時代前期に属するものとみられている<sup>(1)</sup>。

中世においては南北朝時代に葛西武常氏が居城していた城平山城跡や出城的な性格をもつ立栗山城跡が知られている。城平山城跡は山頂に馬場とよばれる平坦部や井戸跡が発見されている。葛西氏は下総国葛西庄から阿宮の地へ来たといわれるが、残念ながら18代も続いた葛西城主の武将としての記録は残されていない<sup>(2)</sup>。

近世になって出雲郡札六十三所観音霊場が開かれ、陰曆4月には多くの巡礼者が諸寺堂を巡り、大いに賑わったといわれている。阿宮地内においても6番の圓通寺や7番の全昌寺に観音堂が開かれている。

#### (註)

- (1) 斐川町教育委員会「天寺平廃寺について」『八雲立つ風十記の丘』No. 84 島根県立八雲立つ風土記の丘、1987年
- (2) 池田敏雄「城平山は葛西氏の山城・葛西城余話」「斐川の地名散歩」斐川町、1987年

## 第3章 上阿宮Ⅰ遺跡の調査

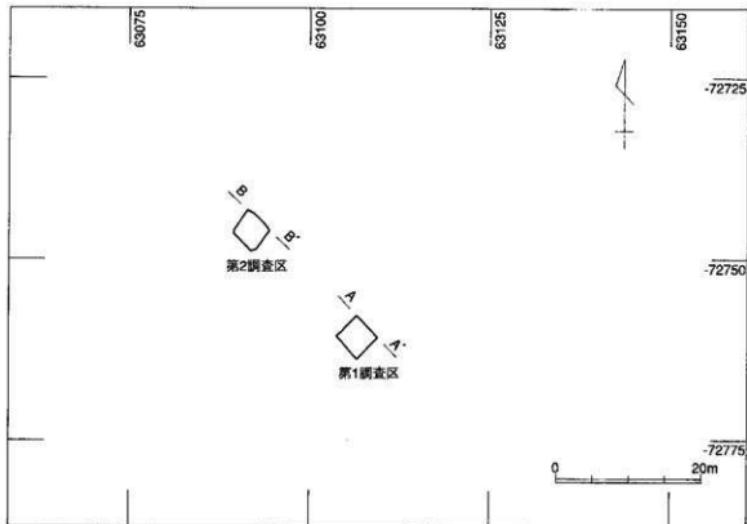
### 第1節 遺跡の位置

上阿宮Ⅰ遺跡は斐川郡斐川町大字阿宮384番地2他に所在する。ここは城平山の南麓700mに位置し、急峻な丘陵地から南へ延びる低丘陵及び谷あいに広がっている。遺跡の南方は斐伊川の氾濫によって堆積した砂地となっている。

周辺には直ぐ東側に上阿宮Ⅱ遺跡が知られるのみであるが、今後分布調査が進めばさらに幾つかの遺跡が発見されるものと思われる。



第3図 上阿宮I遺跡第1・第2調査区位置図



第4図 上阿宮I遺跡第1・第2調査区配置図

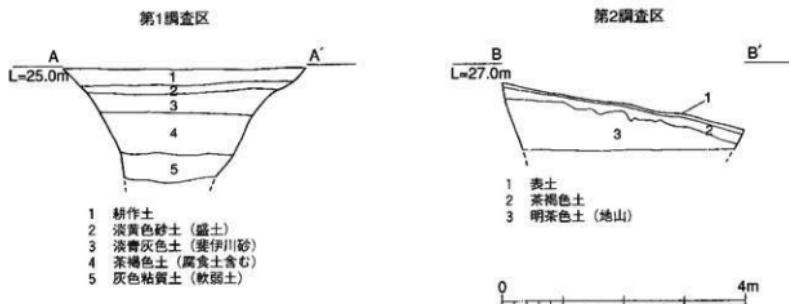
## 第2節 第1調査区の概要

本調査区は標高25mの谷水田に位置し、北は急峻な丘陵地、東西は低丘陵地、南は沖積地が開けている。4×4mの試掘坑を深さ2.5mまで掘削したが、著しい湧水があり壁面が崩壊する危険があったため、これ以上の掘削を中止せざるを得なかった。

耕作土下は他所から搬入した真砂土や斐伊川から流入した砂と考えられる淡黄色砂土や淡青灰色砂質土が40cmの厚さで堆積している。その下は腐食土を含む茶褐色土や軟弱な土質である灰色粘質土が150cm以上堆積している。遺構及び遺物は検出されなかった。(第4図・第5図)

## 第3節 第2調査区の概要

本調査区は標高26m前後の低丘陵に位置し、現状は緩く傾斜する畠地となっている。4×4mの試掘坑を深さ0.2mばかり掘り下げたところ、明茶色の地山が検出された。さらに80cmほど掘削したが地山に変化はなかったので調査を終了した。遺構や遺物は検出されなかった。(第4図・第5図)



第5図 上阿宮Ⅰ遺跡第1・第2調査区断面図 (1:80)

## 第4節まとめ

上阿宮Ⅰ遺跡は平成3年度の分布調査により水田部から土師器、土師質土器、唐津系陶磁器が発見されていた遺跡である。今回は調査範囲が狭く、調査地も限定されていたため調査によって遺構などを確認することができなかつたが、かっての人々は急峻な山と斐伊川との間で生活していたものと想像されることから周辺の谷斜面や南向き斜面などに集落遺跡等が存在する可能性は十分にあると考えられる。

## 第4章 上阿宮Ⅲ遺跡の調査

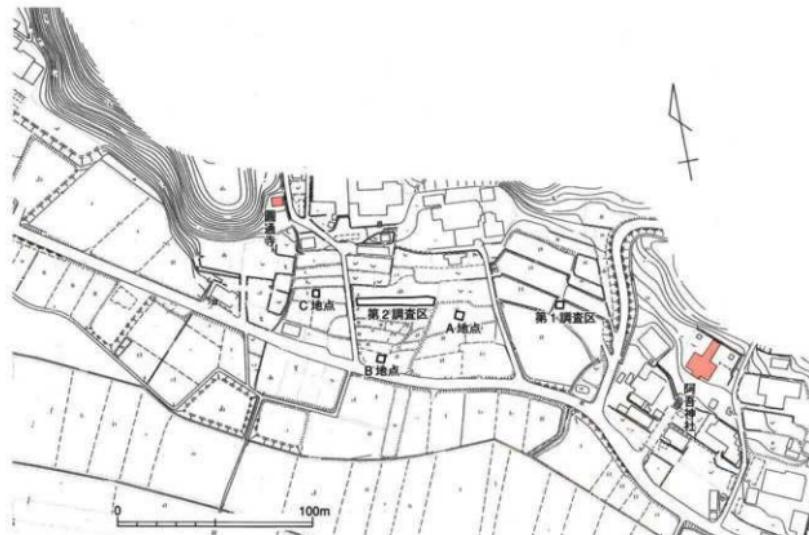
### 第1節 遺跡の位置

上阿宮Ⅲ遺跡は巣川郡斐川町大字阿宮262番地1他（旧小字名 平ノ下）に所在する。ここは城平山の南西麓800m、仏経山（標高366m）の南東麓2,500mに位置し、遺跡の北は急峻な丘陵、南は斐伊川の氾濫によってできた沖積地となっている。

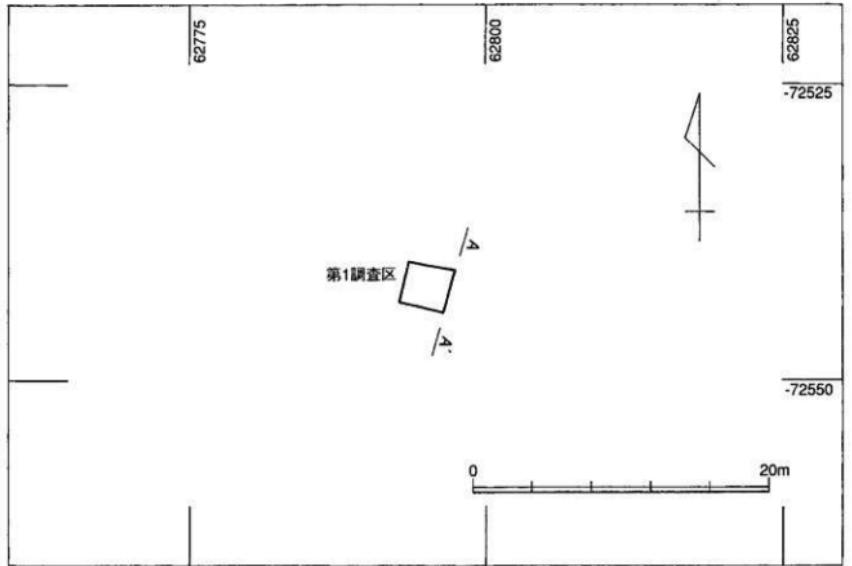
周辺には今のところ遺跡の存在は知られていないが、遺跡の直ぐ北側50mのところに江戸時代中期以降に開かれ、巡礼者でぎわった出雲郡札所6番圓通寺があり、御堂に聖観音像が安置されている。また東側120mには『出雲国風土記』に「阿具社」と呼ばれた阿吾神社が知られ、今でもお子守りさんの名で親しまれている。

### 第2節 第1調査区の概要

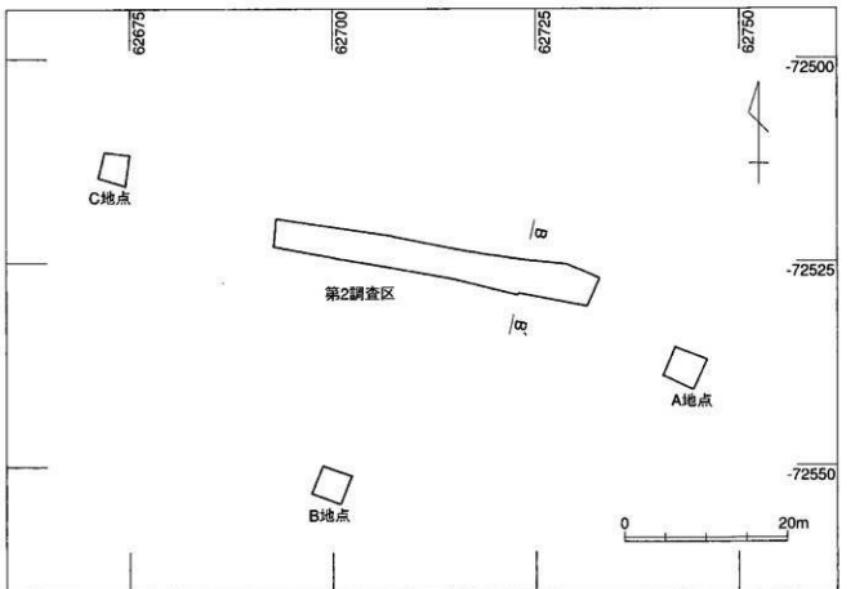
本調査区は標高26.2mの水田に位置し、南に向かって緩く傾斜している。4×4mの試掘坑を深さ1.5mまで掘削した。耕作土下50~70cmで旧田面とみられる灰褐色土や杭列が検出された。さらに下層の灰色砂質土や細礫混じりの淡緑灰色砂質土を掘り下げたが、湧水がひどく壁面崩壊の恐れがあるため調査を中止した。遺構や遺物は検出されなかった。（第7図・第10図）



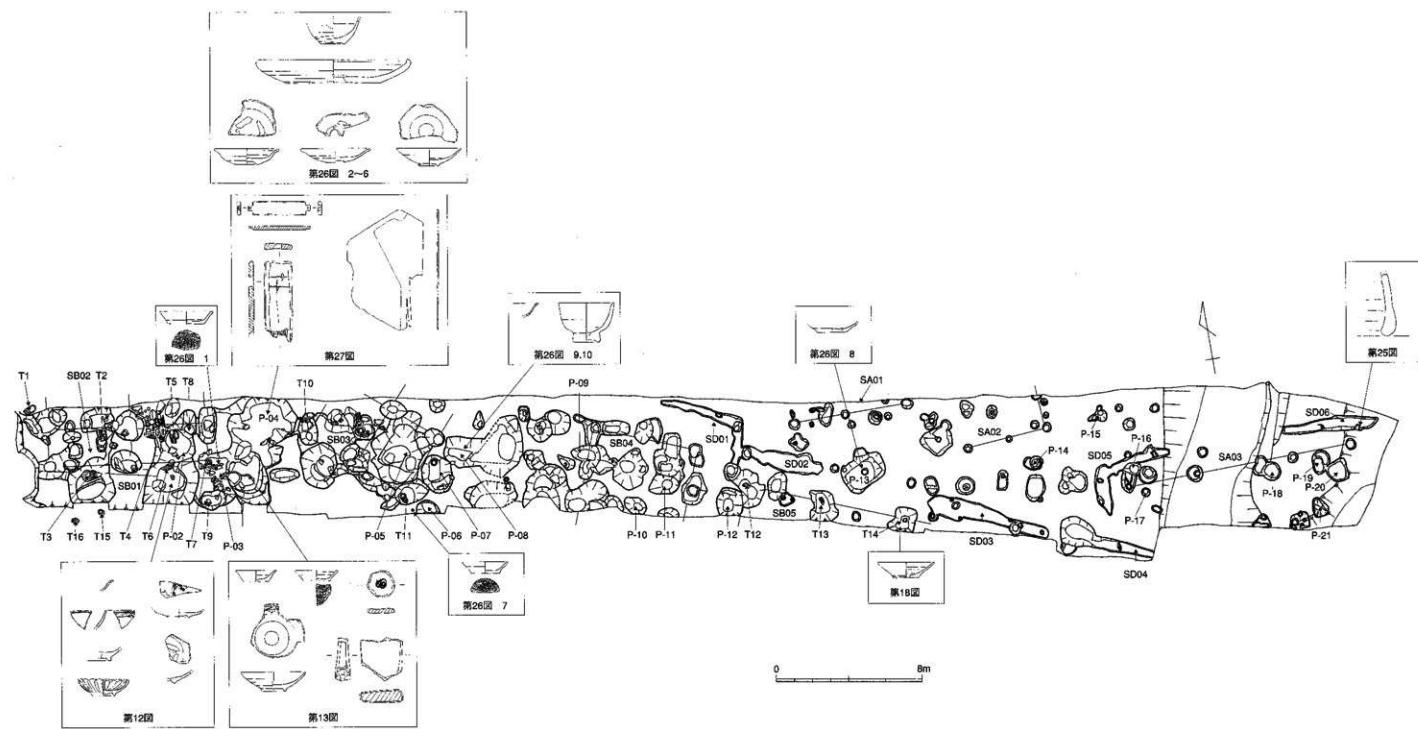
第6図 上阿宮Ⅲ遺跡第1・第2調査区位置図



第7図 上阿宮III遺跡第1調査区配置図



第8図 上阿宮III遺跡第2調査区(A~C地点)配置図



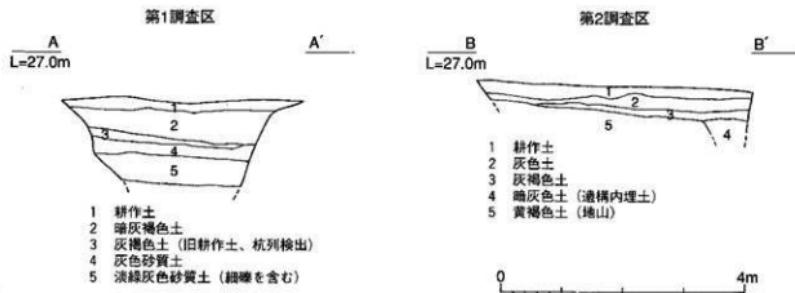
第9図 上阿宮III遺跡第2調査区遺構配置図 (1:80)

### 第3節 第2調査区の概要

本調査区は標高26.8mの水田に位置し、北から派生する緩い傾斜地に立地している。まず4×4mの試掘坑を掘り下がたところ0.3mほどで黄褐色の地山が確認された。この地山を慎重に精査したところ、小ピットや若干の須恵器や土師器、陶磁器が出土した。そこで遺跡が周辺にも広がっていると判断し、改めて調査区を東西に拡張、設定し直して調査を継続した。幾度か拡張したが最終的な調査範囲は南北4m、東西40mで、調査面積は158m<sup>2</sup>に至った。

黄褐色の地山は調査区の東寄りで耕作土下30cm、西寄りで56cmを測り、東から西へ向かって傾斜する地形である。堆積土をみると、20cmの耕作土下は10~25cmの灰色土、10cmの灰褐色土上が比較的均一な堆積をしている。

検出された遺構は調査区の全面で認められ、ほとんどは柱穴状の遺構で、調査区東寄りのピットは径15~90cm前後の小規模なもので、中央から西寄りは径40~150cmを測る大きなピットである。復元された遺構としては掘立柱建物跡5棟(SB01~SB05)、横列状遺構3列(SA01~SA03)、溝状遺構6条(SD01~SD06)などであった。遺物の出土状況については全体的には調査区東寄りでは須恵器、土師器、土師質土器など古代から中世の上器類、中央から西寄りでは近世の陶磁器類が中心であった。(第8図・第9図・第10図)

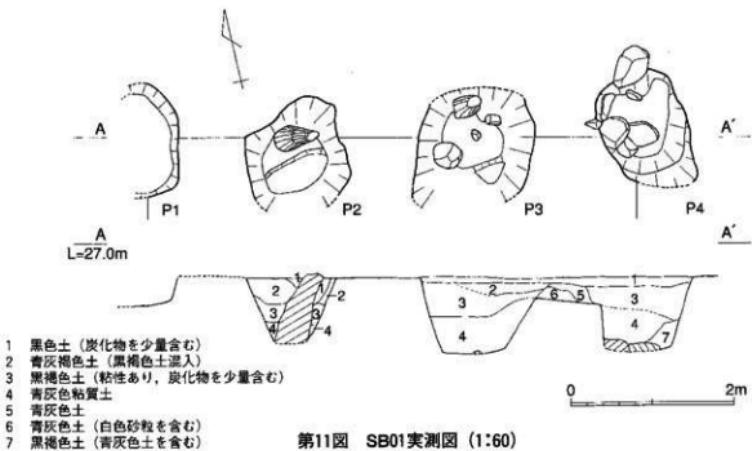


第10図 上阿宮Ⅲ遺跡第1・第2調査区断面図(1:80)

### 1. 検出遺構

#### SB01

調査区の西側南壁寄りで検出された掘立柱建物跡である。柱穴列は東西方向に4穴(3間分)が検出され、南側の調査区外にも続く可能性がある。柱穴は径110~150cmを測る大きな掘り方をもち、不整円形又は方形を呈している。柱間寸法は200cm等間を測る。主軸方向はN78°Wをとる。



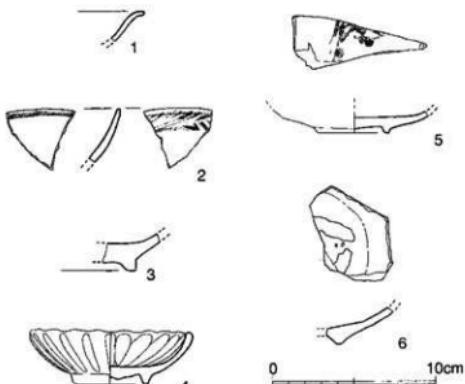
第11図 SB01実測図 (1:60)

P2とP3とともに径28cmの大きな柱根が遺存しており、いずれも南東に傾いて正立していた。またP3の柱根は元々の場所から動かされているものと考えられる。P4の底部には径35cmほどの平らな石が礎盤状に置かれていた。

柱穴の埋土から若干の遺物が出土した。第12図はP3から出土した遺物である。1は端反りの口縁を有する16世紀代の白磁、2、3は漳州窯系の磁器皿で、3は高台を有する染付人皿である。16世紀後半～17世紀初め頃とみられる。4、5は肥前系磁器で、4は輪花状の口縁をもつ。6は肥前系陶器皿である。第13図はP4から出土した遺物である。1、2は土師質土器の皿形、3は肥前系陶器の皿である。4は円盤状の平行で、片面に「ぬ力」が墨書きされているが用途は不明である。5は砥石で、4面を砥石として使用している。その他、図示し得ないがP2からは青磁皿1片、P3からは土師質土器1片、肥前系磁器2片、肥前系陶器1片、P4からは土師質土器1片、肥前系陶器7片、漳州窯系磁器1片が出上している。

## SB02

SB01の北に隣接して検出された総柱の掘立柱建物跡である。柱穴列は東西に3穴（2間）、南北に1穴（1間以上）が検出され、北側の調査区外に続く町



第12図 SB01・P3出土遺物実測図 (1:3)

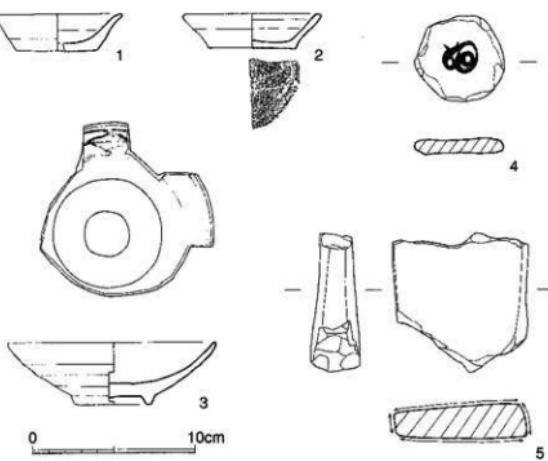
能性がある。柱穴は径45~100cmを測り、掘り方はP1~P5は不整円形、P6は梢円形を呈している。柱間寸法は東西列が230・210cm、南北列が110cmを測る。主軸方向はN81°Wをとる。

P2とP3よりそれぞれ径13cmと14cmの柱根が検出された。SB01の柱根より半分くらいの大きさの柱根である。P6の底部には径25cmの石が礎板状に置かれていた。

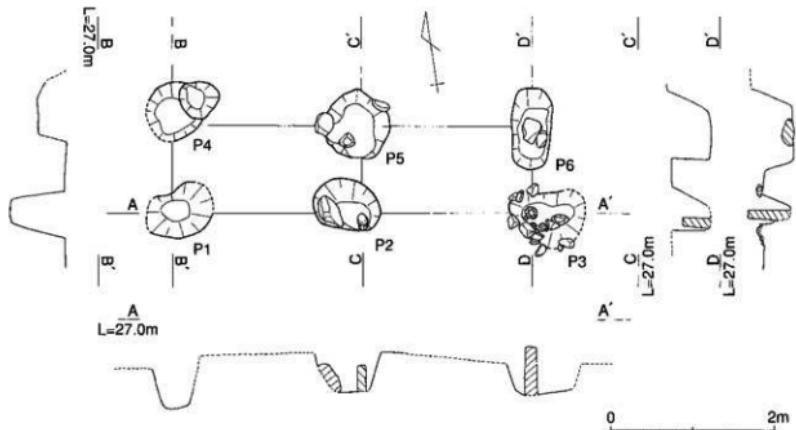
遺物はP6の埋土から中国青磁1片が出土した。16世紀後半から17世紀のもので、葵花皿と思われる。

### SB03

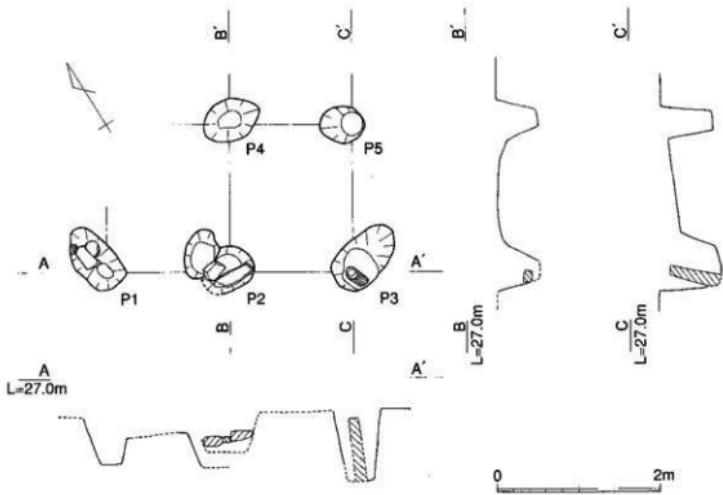
SB02の東2.5mで検出された総柱の掘立柱建物跡である。柱穴列は東西に3穴(2間)、南北に1穴(1間以上)が検出され、北側の調査区外に続く可能性がある。柱穴は径48~95cm



第13図 SB01 · P 4出土物実測図 (1:3)

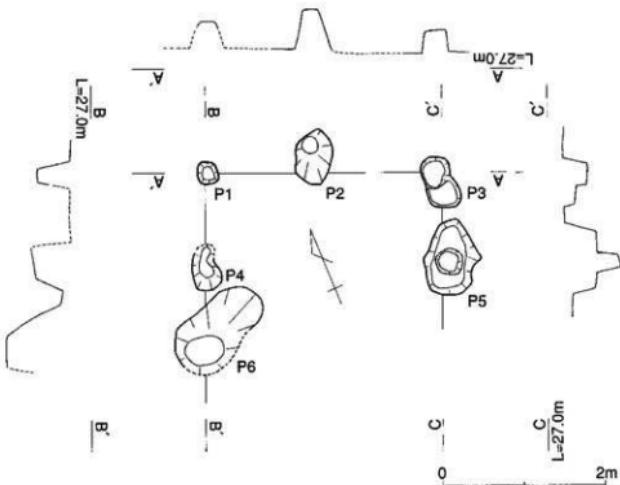


第14図 SB02実測図 (1:60)

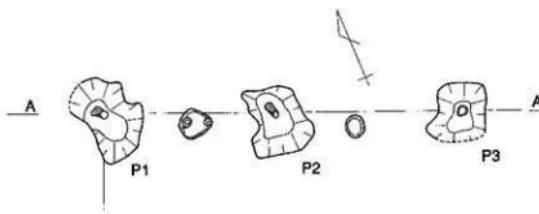


第15図 SB03実測図 (1:60)

を測り、掘り方はP1、P3は楕円形、P2、P4、P6は不整円形を呈している。柱間寸法は東西列が150cm等間、南北列が180cmを測る。主軸方向はN43°Eをとり、SB01とSB02とは方向が大きく異なっている。



第16図 SB04実測図 (1:60)



第17図 SB05実測図 (1:60)



第18図 SB05・P3出土遺物  
実測図 (1:3)

P1には径10cm、P3には径21cmの柱根が遺るが、P1の柱根は現位置ではないと考えられる。P1とP2では礎板状の石がみられるが、P1は柱の中心よりずれ、P2は焼失した痕跡であろうか右の上面が黒く変色していた。

遺物はP4の埋土から肥前系磁器皿1片、P5から土師質土器2片と5cm大の木片が出土した。

#### SB04

SB02の東3.5mで検出された掘立柱建物跡である。柱穴列は東西に3穴（2間）、南北に2穴（2間以上）が検出され、南側の調査区外に続く可能性がある。柱穴は25~70cmを測り、掘り方はP1、P3~P5は不整円形、P2、P6は梢円形を呈している。柱間寸法は東西列が130~160cm、南北列が1.1cm等間を測る。主軸方向はN68°Wをとる。

遺物はP3の埋土から須恵器1片、土師質土器2片が出土した。

#### SB05

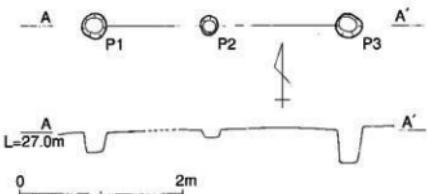
SB04の東1.5mで検出された掘立柱建物跡である。柱穴列は東西に3穴（2間以上）が検出され、南側の調査区外に続く可能性がある。柱穴は長辺105cm前後、短辺55cm前後を測り、掘り方はいずれも隅丸長方形を呈している。柱間寸法は210~230cmを測る。主軸方向はN68°Wをとる。これら柱穴の間に小ピットが検出されているが、建物に伴うかどうかは不明である。

P1~P3のいずれにも径13~17cmの柱根が遺存している。

遺物はP1の埋土から須恵器1片、瓷器系陶器壺1片、P3から比較的残りの良い土師質土器1片（第18図）が出土した。

### SA01

調査区の中央北壁寄りで検出された柵列状遺構である。柱穴列は東西に3穴（2間以上）が検出され、北側の調査区外に対応する柱穴が続く可能性もあるが、SB02に類似していることから柵列状構とした。柱穴は径22~33cmを測る小さな円形を呈している。柱間寸法は140・170cmを測り、主軸方向はN80°Wをとる。

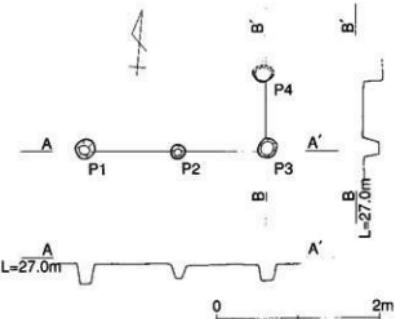


第19図 SA01実測図 (1:60)

### SA02

SA01の東1mで検出されたL字状に屈曲した柵列状遺構である。柱穴列は東西に3穴（2間）、南北に2穴（1間以上）が検出され、北側の調査区外に続く可能性がある。柱穴は径17~24cmを測る小さな円形を呈している。柱間寸法は東西列が110cm等間、南北列が90cmを測る。主軸方向はN80°Wをとる。

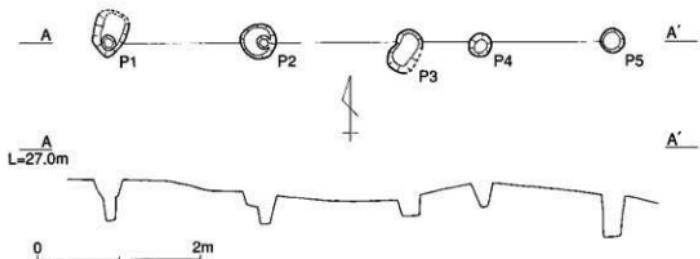
遺物はP3の埋土から古墳時代の土器片1片が出上した。



第20図 SA02実測図 (1:60)

### SA03

調査区の東寄り中央で検出された柵列状遺構である。南北とも対応する柱穴が見られないこ



第21図 SA03実測図 (1:60)

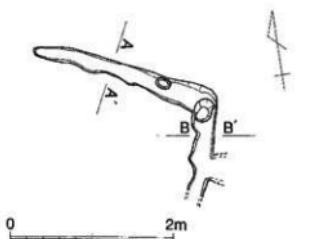
とから柵列状遺構とした。柱穴列は東西に5穴(4間)が検出され、柱穴は径17~30cmを測る小さな円形を呈している。柱間寸法は190・180・90・160cmを測る。主軸方向はN80°Wをとる。SA03とSD06とはほぼ並行して走っている。

遺物はP1の墨土から須恵器1片、土師器2片が出土した。いずれも古墳時代のものである。

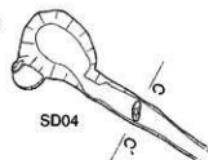
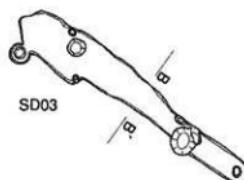
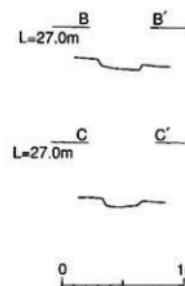
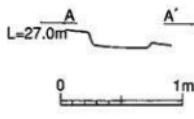
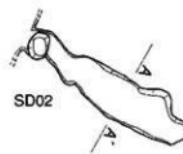
#### SD01

調査区の中央北壁寄りで検出されたL字状に走る溝状遺構である。溝の長さは東西235cm、南北140cm以上、幅は17~27

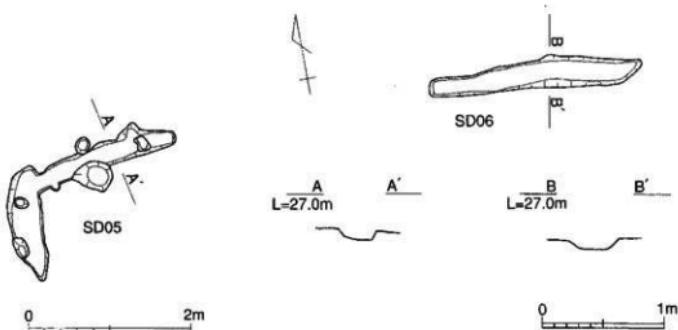
cm、深さは8cmを測る。溝底はU字状を呈する。SD02と接しているが切り合い関係は不明である。



第22図 SD01実測図(遺構1:60、断面1:40)



第23図 SD02・SD03・SD04実測図(遺構1:60、断面1:40)



第24図 SD05・SD06実測図（遺構1:60、断面1:40）

### SD02

SD01の東に接し、東西に走る溝状遺構である。溝の長さは230cm、幅は26~50cm、深さは10cmを測る。溝底は逆台形状を呈する。

### SD03

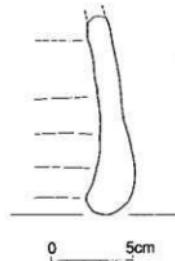
SD02の東3mで検出された溝状遺構である。溝の長さは243cm、幅は26~55cm、深さは5cmを測る。溝底は逆台形状を呈する。遺物は溝内から須恵器1片が出土した。

### SD04

SD03の東0.3mで検出された溝状遺構である。溝の長さは東西215cm、南北140cm、幅は21~43cm、深さは8cmを測る。溝底は逆台形状を呈する。SD02からSD04はほぼ同じ方向に溝が走っているので、同一の溝の可能性がある。しかし、SD02とSD03の間には同時期かどうかは不明だが柱穴等が存在することから断定することはできない。

### SD05

調査区の東寄りSD04の北0.5mで検出されたL字状に走る溝状遺構である。溝の長さは東西215cm、南北140cm、幅は21~43cm、深さは8cmを測る。溝底は逆台形状を呈する。遺物は溝内から須恵器1片と肥前系磁器皿1片が出土した。



第25図  
SD06出土遺物実測図 (1:3)

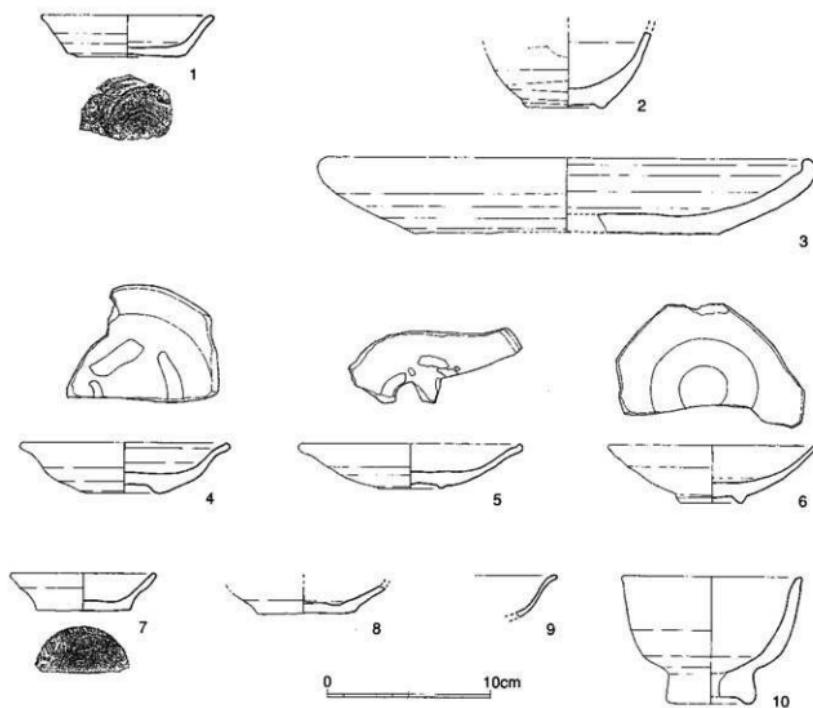
## SD06

SD05の東3.15mで検出された溝状遺構である。溝の長さは263cm、幅は24~40cm、深さは9cmを測る。溝底は逆台形状を呈する。SD05とは方向が類似することから同一の溝の可能性があるが、間が谷地形になっていることから断定はできない。遺物は溝の東南端で土師器の窓(第25図)、中央南端で土師器の壺が出土したが、遺構面より若干浮いた状態だったので、遺構に伴うかどうかは判然としない。

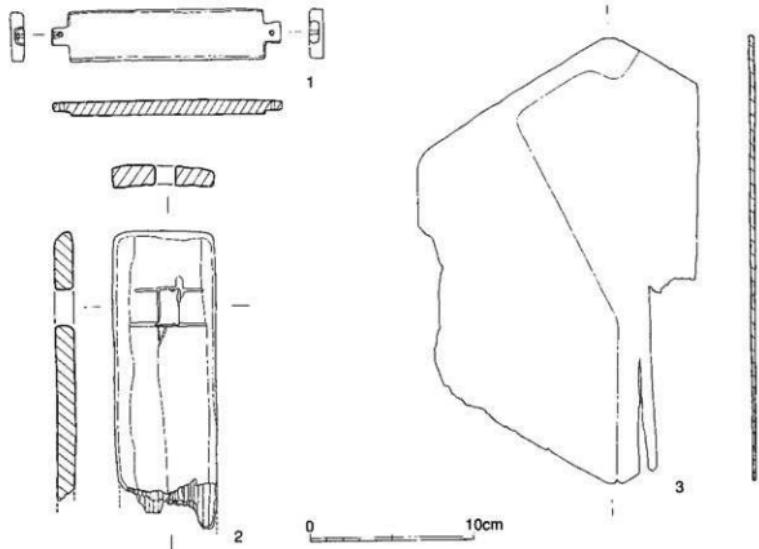
## 2. 出土遺物

### 遺構に伴う出土遺物

第26図1はP-03出土の土師質上器の皿で、口縁部にススが付着している。2~6はP-04出土で、2は肥前系陶器の碗、3は備前系陶器の浅鉢である。4~6はいずれも肥前系陶器の皿



第26図 遺構に伴う出土遺物実測図1 (1:3)



第27図 造構に伴う出土遺物実測図2 (1:3)

である。4、5は内面に砂目痕、6は蛇の目状に釉剥ぎが施されている。7はP-06のすぐ西側で出土した土師質土器の皿である。8はP-13出土で、土師質土器の皿である。9、10はP-08出土で、9は白磁皿である。10は木製漆塗椀で、口径10.8cmを測り、外間に黒、内面は黒に朱色の漆がみられる。この他、青花も1点出土している。

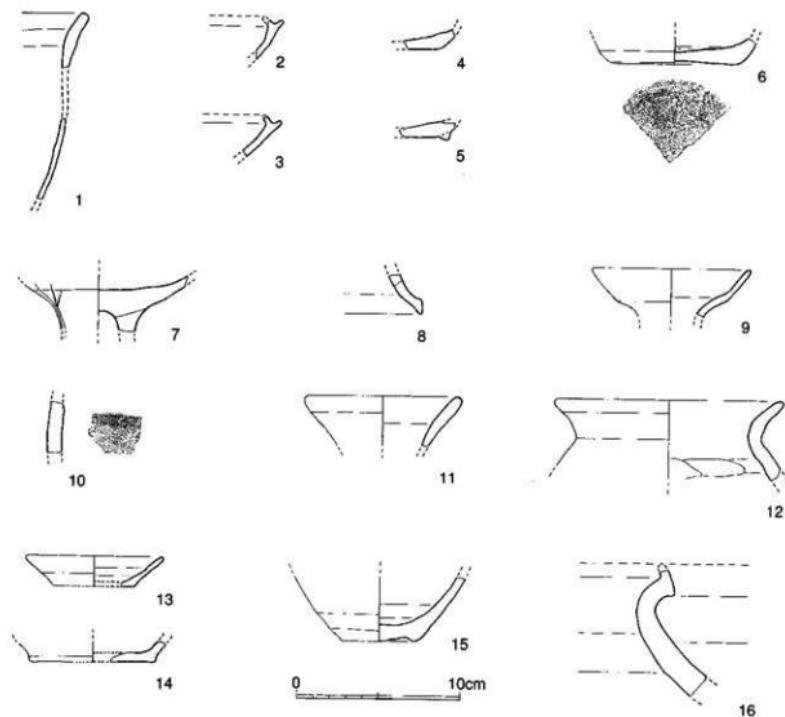
時期的には、白磁は16世紀、備前系陶器や肥前系陶磁器は16世紀後半から17世紀初めと考えられる。

第27図はP-07出土の木製品で、1は札状のもので13.9cmの板の両端に突起が張り出し、3mmほどの孔が片方から空けられている。片面に墨書きが認められるが篆文は不明である。2は桶状容器の把手と思われ、基部が破損しているが現存長18.1cmを測る。上部に21×11mmの長方形の枘孔がある。3は6角形の薄い板状のもので、半分以上が黒く変色している。堆積土による2次的なものかも知れない。この他、P-07からは青花1片、肥前系磁器5片、肥前系陶器5片が出土している。

この他、図示し得ない柱穴出土の遺物は、表1に記しておく。

#### 造構に伴わない出土遺物

第28図1は、弥生土器の壺口縁部と胴部である。2～10は須恵器である。2、3は立ち上がりを有する壺、4～6の底部外面には回転糸切りがみられる。5は低い高台を有する。7、8



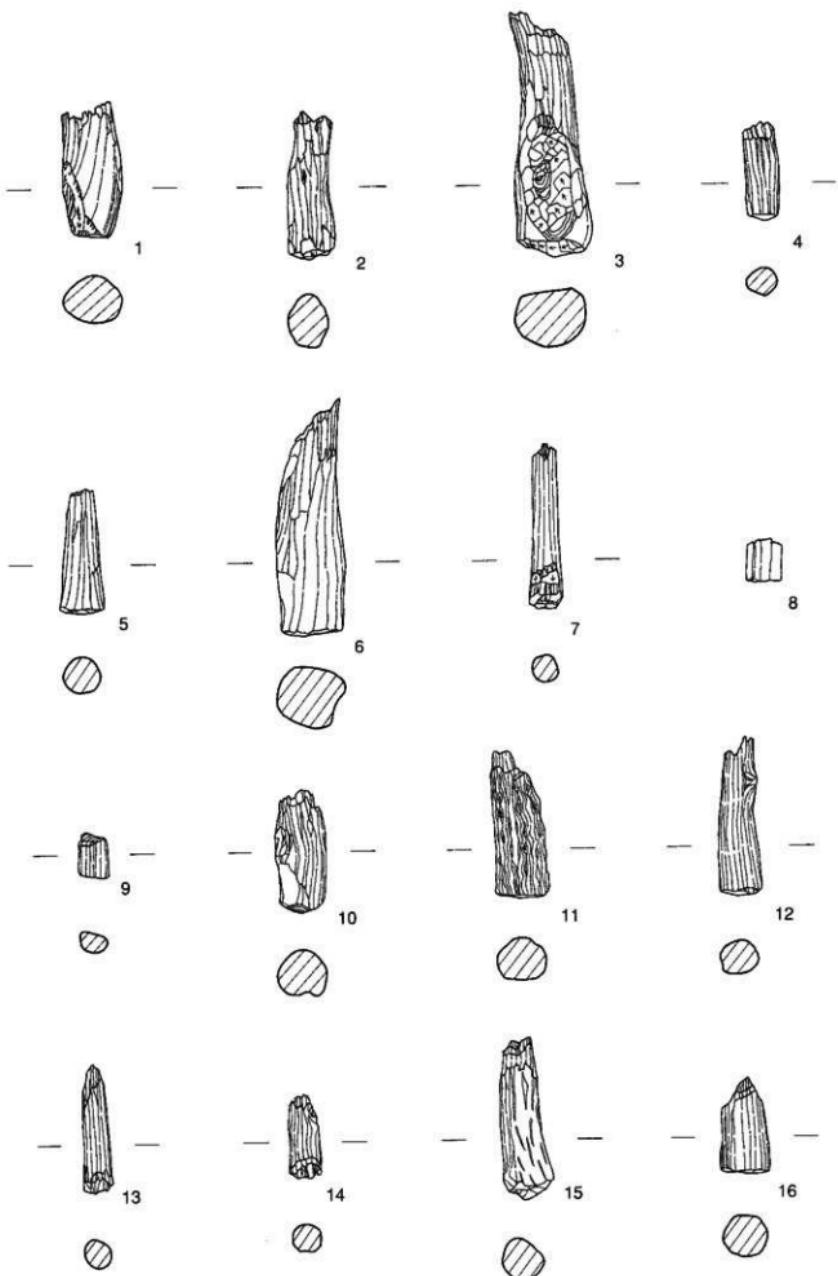
第28図 遺構に伴わない出土遺物実測図 (1:3)

は高坏で、7は2方向の透かしがあり、8は脚部に1方向のみの透かしが認められる。9は壺の口縁部である。10は壺胴部で、15条以上の波状文が施されている。11、12は土師器で、11は壺口縁部、12は壺の口縁部から胴部である。13、14は土師質土器の皿である。15は肥前系陶器の碗で、削り出し高台を有する。16は瓷器系陶器の壺口縁部から胴部である。赤茶色を呈する。その他、図示し得ないが常滑系陶器や備前系陶器が若干出土している。

時期的には、1は弥生時代前期頃、2、3、7～12は古墳時代後期、4～6は奈良時代に属する。16は13世紀後半、15は16世紀後半～17世紀初めのものと考えられる。

## 出土柱根

出土した柱根は16本であるが、そのうち第29図8は皮のみ、9は横になった状態で出土した。この2例を除き、柱根の長さは32～100cm、最大径は13～28cmを測る。皮つきのものが7本、底部に工具痕が認められるものが10本、側面に面取りがあるものが3本であった。樹種同定についての詳細は後述するが、クリ13本、スギ1本、ウルシ属類似1本であった。(表2)



第29図 出土柱根実測図 (1:20)

表1 出土遺物一覧表（図示し得ない柱穴出土遺物）

出土地点	種別	器種	数量
P-01	肥前系磁器	皿	1
P-02	肥前系磁器	皿	1
P-05	土師質土器	皿	1
	須恵器		1
P-06	土師質土器		2
	備前系陶器	壺	1
	土師質土器	皿	4
P-07	青花	皿	1
	肥前系磁器	皿	5
	肥前系陶器	皿	5
P-09	土師質土器	皿	1
	須恵器		1
P-10	土師質土器		2
P-11	土師質土器		1
P-12	須恵器	壺	1
P-14	須恵器		1
P-15	須恵器	壺	1
P-16	土師器	壺	4
P-17	土師質土器		2
P-18	土師器		4
P-19	土師器		7
	須恵器		1
P-20	土師器		5
	土師質土器		4
P-21	土師質土器		2

表2 出土柱根一覧表

番号	法量(cm)			皮の有無	底部調整	備考
	現存長	最大径	基部径			
T1	51	23	13		腐食	
T2	58	19	19		工具痕幅 7cm	
T3	100	28	25~29	有	工具痕幅 5.5~8cm	
T4	66	14	9~13	有	工具痕幅 4cm	
T5	60	19	19	有	工具痕幅 4cm	
T6	94	28	22~30		工具痕幅 4cm	
T7	38	13	12	有	工具痕幅 4.5cm	
T8				有		皮のみ
T9	19	13	12		不明	横位で出土
T10	52	20	18		工具痕幅 5cm	
T11	58	21	21		工具痕幅 4cm	
T12	65	17	13~17		腐食、側面面取り	
T13	53	13	12		腐食、側面面取り	
T14	32	13	13		腐食、側面面取り	
T15	66	21	16~19	有	工具痕幅 4cm	
T16	38	19	19	有	工具痕幅 4cm	

## 第4節 範囲確認調査

第2調査区で検出された遺構がどこまで広がっているのか、遺跡の範囲を探るために周辺3ヶ所（A地点～C地点）に $4 \times 4\text{m}$ のグリッドを設定して調査を行った。（第1図・第6図・第8図）

### A 地点

標高25mの水田に位置する。深さ65cmまで掘り下げたところ茶褐色の地山が確認された。耕作土下は、水田の床土にあたる灰褐色土（2層）、灰色土（3層）が堆積し、その下の暗灰色砂質土（4層）から須恵器12点、土師器9点、陶磁器1点が出土した。

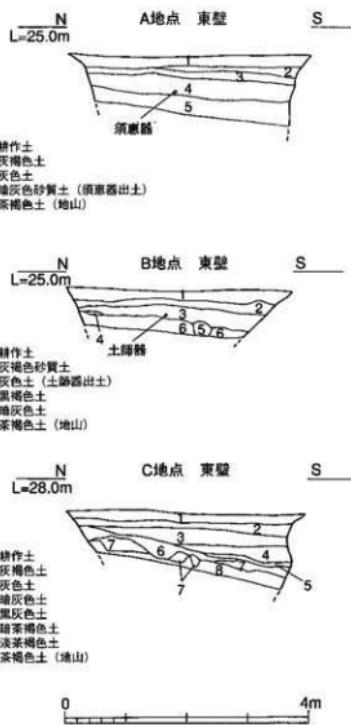
### B 地点

標高24mの水田に位置する。深さ40cmまで掘り下げたところ茶褐色の地山が確認された。耕作土下は、床土にあたる灰褐色土（2層）が堆積し、その下の灰色土（3層）から土師器1点、陶磁器1点が出土した。地山との間で黒褐色土（4層）や柱穴の埋土とみられる暗灰色土（5層）が検出された。

### C 地点

標高27mの水田に位置する。調査区北側で深さ50cm、南側で100cmまで掘り下げたところ茶褐色土の地山が確認された。地山は北から南へ急傾斜している。耕作土下は、床土にあたる灰褐色土（2層）、盛土された灰色土（3層）、暗灰色土（4層）が堆積し、その下の黒灰色土（5層）や暗茶褐色土（6層）は地山に沿って堆積している。

以上、3地点において遺跡範囲確認調査を行った。調査の結果、遺跡の範囲は東側においては、第1調査区で遺構が未検出であることからA地点の東に南北に走る舗装道路までとする。南側は町道の南が未確認ではあるが、ここでは遺構が検出されたB地点辺りまでとする。西側はC地点で遺構などが検出されず、地山も自然地形に



第30図 A～C 地点東壁土層図 (1:80)

近いことからC地点の東側までを遺跡の範囲として考えておきたい。なお、北側は第2調査区より北が急峻な斜面になることから民家までの範囲としておきたい。

これにより、現時点では上阿宮Ⅲ遺跡は東西80m、南北70mの範囲で捉えることができる。

## 第5節 まとめ

阿宮地区でこれまでに行われた発掘調査の多くは沖積地や丘陵急斜面であったため、これといった成果を見ることができなかった。それだけにこの度の上阿宮Ⅲ遺跡の調査によって古代～近世にかけての遺構が確認されたことは、阿宮の歴史を解明する上で大変意義深いものと考えている。以下、上阿宮Ⅲ遺跡第2調査区で発見された遺構等について若干検討を行うこととする。

検出された遺構は、掘立柱建物跡5棟、柵列状遺構3列、溝状遺構6条である。

掘立柱建物跡の時期は、SB01・P3出土遺物、隣接する柱穴群の出土遺物からみて、戦国期～江戸初期（16世紀後半～17世紀初め）にかけて建設または廃絶したものと考えられる。出土遺物の多くは肥前系の陶磁器で、中国製の白磁、漳州窯系磁器、土師質土器はわずかに見られるにすぎない。SB01、SB04、SB05は側柱建物、SB02、SB03は総柱建物の形式をとる。各建物の性格などはよく分からぬが、SB01は柱穴掘り方や柱根が相当大きく堅牢な建物が想定され、集落の中心的な位置を占めていた可能性が考えられる。SB01とSB02は軒を接することから相前後して建てられていたであろうか。SB01とSB05は同一の主軸方向をとり同時期とみられる。この他にも多くの柱穴や柱根が集中して検出されることから、近接した時期に何回か立替を重ね建物が建てられていたものと考えることができる。SB03・P2の礎板状の石は焼失痕跡を思わせ、建物の火災が原因で集落の廃絶があったことも想像される。

柵列状遺構については、いずれも柱穴の規模が小さく、同一方向に建てられている。時期としては、SA02・P3出土遺物から古墳時代後期に収まるものと考えられる。溝状遺構についてもSD01とSD06出土遺物から、古墳時代に属するものと考えられる。SD02からSD03、SD04にかけては一直線上にあることから同一溝と見られるが、溝底部のみの検出のため断定することはできない。このような古墳時代における溝状遺構は、町内神庭の佐利保谷遺跡においても知られ「集落内の幾つかの区画性をもった溝の一部」<sup>(1)</sup>と分析されており、ここでも排水のための溝という意味のほかに建物間を区画する溝の可能性を考えておくことにしたい。

このように上阿宮Ⅲ遺跡では古墳時代における柵列状遺構や溝状遺構、戦国期から江戸初期における掘立柱建物が中心の遺跡として確認することができた。しかし、わずか160m<sup>2</sup>に満たない調査面積では遺跡の全容を把握することは困難である。第4節で述べたように、この遺跡は周辺にも広がっていることが既に分かっている。従って、今後周辺の精密な調査と研究が進んで新たな資料を踏まえた上で、より詳細な阿宮の歴史が解明されることを期待したい。

### （註）

- （1）『佐利保谷遺跡発掘調査報告書』斐川町教育委員会、2004年

表3 出土遺物(土器)観察表

検査番号	出土地	種別	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	調査	備考
				口径	底径	厚さ					
13-1	SB01-P4	土師質土器	皿	(8.0)	(5.0)	2.25	密(雲母を微量に含む)	良好	暗褐色	内外面: 回転ナデ 底部外側: 回転糸切り	口部内外面 にスス付着
13-2	SB01-P4	土師質土器	皿	(8.5)	5.4	2.05	密(雲母を微量に含む)	良好	赤褐色	内外面: 回転ナデ 底部外側: 回転糸切り	
18	SB05-P3	土師質土器	皿	(11.2)	(6.0)	3.05	1.5mm以下の砂粒を微量に含む	良好	淡褐色	内外面: 回転ナデ 底部外側: 回転糸切り	
25	SD06	土師器	甕			(5.0)	1.5mm以下の砂粒を少し含む	良好	淡赤茶色	内面上面: ケズリ 内面下部: 黒いナデ	外周にスス付着
26-1	P-03	土師質土器	皿	(10.6)	6.0	2.35	密(雲母を微量に含む)	良好	暗褐色	内外面: 回転ナデ 底部外側: 回転糸切り	口縁部内外面 にスス付着
26-7	P-06	土師質土器	皿	(8.9)	5.8	2.3	密(雲母を微量に含む)	良好	赤褐色	内外面: 回転ナデ 底部外側: 回転糸切り	内面にスス付着
26-8	P-13	土師質土器	皿			6.0	1mm以下の砂粒を多く含む	やや不良	淡茶色	不明	磨剣が差し い

## 過橋外出土遺物

28-1	孫毛土器	壺			1mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部: 暗褐色 腹部: 黒褐色	口縁部内側: ナデ 他は不明		
28-2	頬窓器	壺			密	良好	灰色	内外面: 回転ナデ		
28-3	頬窓器	壺			密	良好	灰色	内外面: 回転ナデ		
28-4	頬窓器	壺			密	良好	暗灰色	内外面: 回転ナデ 底部外側: 回転糸切り		
28-5	頬窓器	壺			密	良好	淡茶色	内外面: 回転ナデ 底部外側: 回転糸切り 後ナデ	高台付	
28-6	頬窓器	壺			0.5mm以下の砂粒を含む	やや不良	赤褐色	内外面: 回転ナデ 底部外側: 回転糸切り 後ナデ		
28-7	頬窓器	高壺			0.5mm以下の砂粒を含む	良好	内面: 暗灰色 外側: 灰色	内外面: 回転ナデ	透し2方面	
28-8	頬窓器	高壺			密	良好	灰色	内外面: 回転ナデ	透し1方面 (脚部)	
28-9	頬窓器	壺	(9.6)		密	良好	灰褐色	内外面: 回転ナデ		
28-10	頬窓器	壺			密	良好	暗褐色	内外面: 回転ナデ	液状化15%以上	
28-11	土師器	壺	(9.6)		密	やや不良	淡赤茶色	不明		
28-12	土師器	壺	(14.0)		1mm以下の砂粒を含む	良好	淡茶色	内外面: ナデ 腹部内面: ヘラ削りか		
28-13	土師質土器	皿	(8.4)	(5.0)	1.85	密	良好	淡赤色	内外面: 回転ナデ 底部外側: 回転糸切り	
28-14	土師質土器	皿			7.6	0.5mm以下の砂粒を含む	やや不良	赤茶色	内外面: 不明 底部外側: 回転糸切り	

※ ( ) 内の数字は復元

表4 出土遺物（陶磁器）観察表

拂団番号	出土地	種別	器種	時 期	特 微
12-1	SB01・P3	白磁	皿	16C	
12-2	SB01・P3	漳州窑系磁器	皿	16C後半～17C初め	染付
12-3	SB01・P3	漳州窑系磁器	大皿	16C後半～17C初め	染付
12-4	SB01・P3	肥前系磁器	皿	17C前半	輪花、2次焼成
12-5	SB01・P3	肥前系磁器	皿	17C中頃	染付
12-6	SB01・P3	肥前系陶器	皿	17C	砂目、削り出し高台
13-3	SB01・P4	肥前系陶器	皿	17C	染付、蛇の目状釉剥
26-2	P-04	肥前系陶器	碗	17C前半	削り出し高台
26-3	P-04	肥前系陶器	浅鉢	16C後半～17C初め	
26-4	P-04	肥前系陶器	皿	17C前半	砂目、2次焼成
26-5	P-04	肥前系陶器	皿	17C前半	砂目
26-6	P-04	肥前系陶器	皿	17C前半	蛇の目状釉剥、2次焼成
26-9	P-08	白磁	皿	16C	
遺構外出土遺物					
28-15		肥前系陶器	碗	17C前半～中頃	2次焼成
28-16		瓷器系陶器	壺	13C後半	赤茶色

表5 出土遺物（石製品）観察表

拂団番号	出土地	種別	法量(cm, g)				備 考
13-4	SB01・P4	円錐状石製品	径5.5		厚0.9	重量36.4	「ぬ力」墨書
13-5	SB01・P4	砥石	現存長8.5	幅8.1	最大厚1.4～2.0	重量248	砥ぎ面4面

表6 出土遺物（木製品）観察表

拂団番号	出土地	種別	法量(cm)			備 考
26-10	P-08	椀	口径(10.8)	底径(5.1)	器高(7.8)	外面:黒漆塗 内面:黒+赤漆塗
27-1	P-07	札状	最大長13.9	最大幅3.1	最大厚0.9	片面に墨書あり
27-2	P-07	把手	現存長18.1	最大幅6.3	最大厚1.2	上面に21×11mmの枘孔あり
27-3	P-07	板状	最大長27.2		最大厚0.3	6角形状

※ ( ) 内の数字は復元

## 第5章 上阿宮Ⅲ遺跡発掘調査に伴う出土柱の樹種

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）  
古野 毅（島根大学総合理工学部）

### はじめに

本報は、島根県斐川町教育委員会が文化財調査コンサルタント（株）に委託し実施した調査報告を簡略化したものである。

上阿宮Ⅲ遺跡は島根県中央部、簸川郡斐川町阿宮上阿宮に立地する遺跡である。発掘調査に伴い出土した16世紀後半から17世紀中頃の柱を含む木質遺物の樹種同定結果を示し、柱の用材について若干の考察を加えた。

### 分析試料について

図1に調査区平面図を示し、同平面図上に樹種同定を行った試料の配置を示す。

### 木材樹種同定方法

渡辺報告（2000）に従い永久プレパラートを作成した。また作成した永久プレパラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタント（株）にて保管管理をしている。観察・同定は光学顕微鏡ドで40倍～600倍の倍率で行った。

### 木材樹種同定と記載

分類群毎に記載を行った。表1に樹種同定結果の一覧表を示し、代表的な試料の顕微鏡写真を図版に掲載した。

① スギ：*Cryptomeria japonica* D.Don

試料No：9 (W04110508)

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の幅は広い。樹脂細胞は主に晩材部に分布している。また、分野壁孔はスギ型で2～3個存在することなどから、スギと同定した。

② クリ：*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

試料No：1 (W04110501)、2 (W04110502)、3 (W04110503)、4 (W04110504)、5 (W04110505)、6 (W04110506)、7 (W04110507)、10 (W04110509)、12 (W04110511)、13 (W04110512)、14 (W04110513)、15 (W04110514)、16 (W04110515)、

記載：環孔材で円形ないし稍円形の長径300～400μmの道管が単独で多列に配列し、孔隙部の幅はかなり広い個体が多い。孔隙外の道管は50μm程度で、移行部に100～200μmの大きさのものが顕著な個体もある。孔隙外での道管の配列は放射状、あるいは火炎状である。道管せん孔は単

表1 同定結果一覧

試料No.	整理番号	樹種	同伴遺物の時期	種別	備考
1	W04110501	クリ		柱根	
2	W04110502	クリ		柱根	
3	W04110503	クリ		柱根	SB01
4	W04110504	クリ		柱根	SB02
5	W04110505	クリ		柱根	
6	W04110506	クリ		柱根	SB01
7	W04110507	クリ		柱根	SB02
9	W04110508	スギ	16C後半～17C中頃	柱根か	
10	W04110509	クリ		柱根	SB03
11	W04110510	ウルシ属類似		柱根	SB03
12	W04110511	クリ		柱根	SB05
13	W04110512	クリ		柱根	SB05
14	W04110513	クリ		柱根	SB05
15	W04110514	クリ		柱根	
16	W04110515	クリ		柱根	

せん孔で、チロースが顯著に認められる。孔圈道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は単接線状に配列する傾向にある。放射組織は単列同性型である。以上の組織上の特徴からクリと同定した。

### ③ ウルシ属類似 cf. *Rhus* sp.

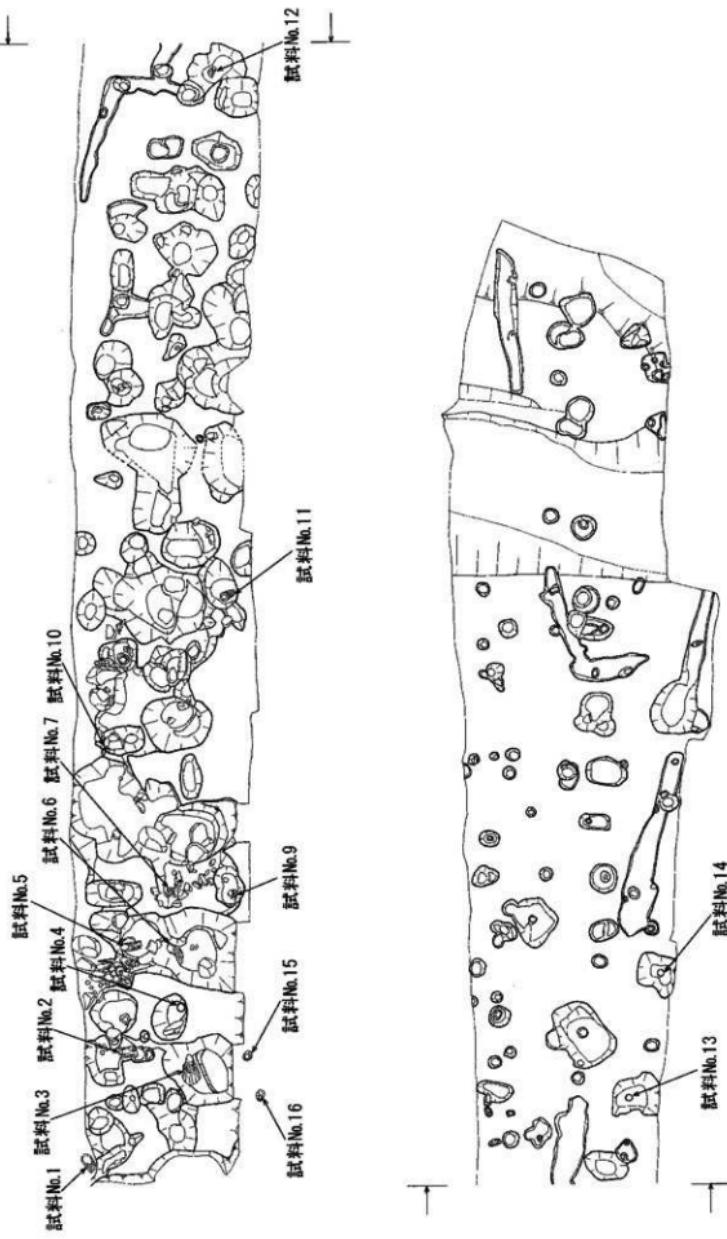
試料No.: 11 (W04110510)

記載：年輪幅が非常に広く、完全な1年輪を切片として得ることができなかった。150～300μmで円形ないし梢円形の道管が単独ないし数個放射方向に複合し、極めて幅の広い多列に配列する環孔状配列の様相をなしている。孔圈外でも道管径をほとんど変えず、単独ないし数個が放射方向に複合して散在する。年輪界に近づくと道管径を30μmまで急激に減ずる。道管せん孔は単せん孔で道管相互壁孔は交互状である。また、道管中にはチロースが非常によく発達している。道管と放射組織あるいは軸方向柔細胞との間の壁孔は明瞭なレンズ状となり、特徴的である。軸方向柔組織は周囲状およびターミナル状である。放射組織は異性で、1～3細胞幅であり、両端には直立細胞および方形細胞が出現する。また、放射柔細胞中に結晶が僅かに認められる。以上の組織上の特徴から、ウルシ属と推定されるが、断定には至らない。

### 柱の樹種について

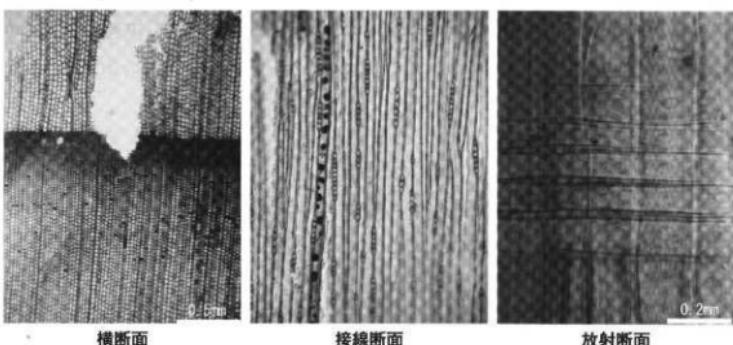
表1に示したように15本の柱のうち、クリが13本を占め、スギ、ウルシ属類似が各1本であった。島根県下では「柱」の用材としてクリが用いられることが多く、針葉樹のスギ、ヒノキが次ぐ。

図1 同定試料の分布

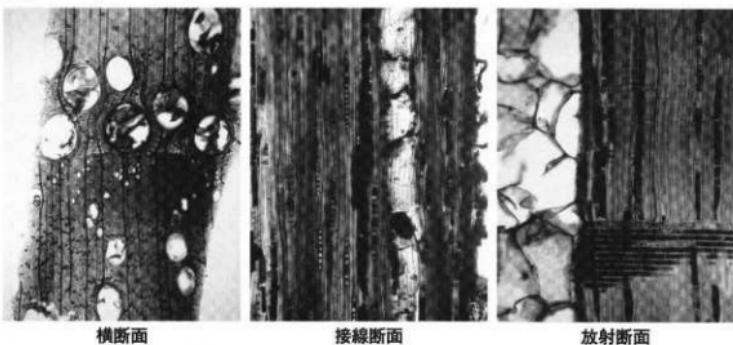


スギ *Cryptomeria japonica* D.Don  
試料 No. 9 (W04110508)

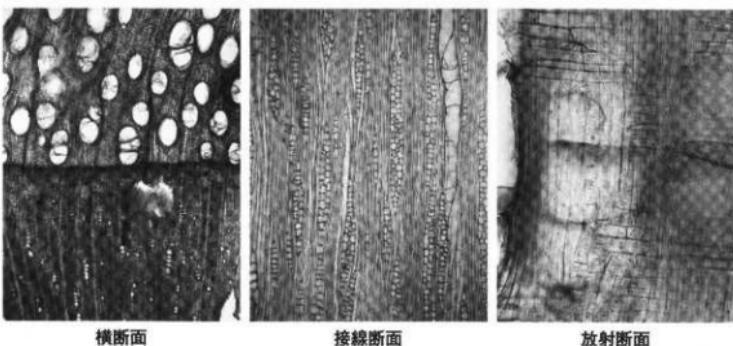
図版



クリ *Castanea crenata* Sied. et Zucc.  
試料 No.12 (W04110511)



ウルシ属類似 *cf. Rhus* sp.  
試料 No.11 (W04110510)



スギとした試料No.9は用材としては多いが、今回の試料は関連する柱が無く、横たわった状態で出土するなど「柱」でなかった可能性も示唆される。

また、ウルシ属類似とした試料No.11は、2間×1間以上の建物(SB03)の南西端に位置する柱であった。ウルシ属(ウルシ、ヌルデ、ハゼノキなど)とすれば用材として希な例であることから、特筆すべき事である。

建築部材の内、「柱」は出土量も多い。またその出土状況から、用途(柱)を決め易い。このため、建築部材の用例研究の対象としては優れていると言える。クリやスギ、ヒノキのように「柱」として用いられることが多い樹種はもちろん、今回のウルシ属など希な樹種についても、建物内の位置(配置)など意図がある場合もあり、今後積極的に樹種鑑定が行われるべきであろう。

## まとめ

柱材の樹種同定から、以下のことが明らかになった。

- ① 樹種同定の結果、スギ、クリ、ウルシ属類似の3分類群を同定した。
- ② 15試料の内、クリが12試料とほとんどを占めた。
- ③ 今回のスギ(No.9)は、柱材でない可能性がある。
- ④ ウルシ属類似(No.11)は2間×1間以上の建物(SB03)の南西端に位置した。

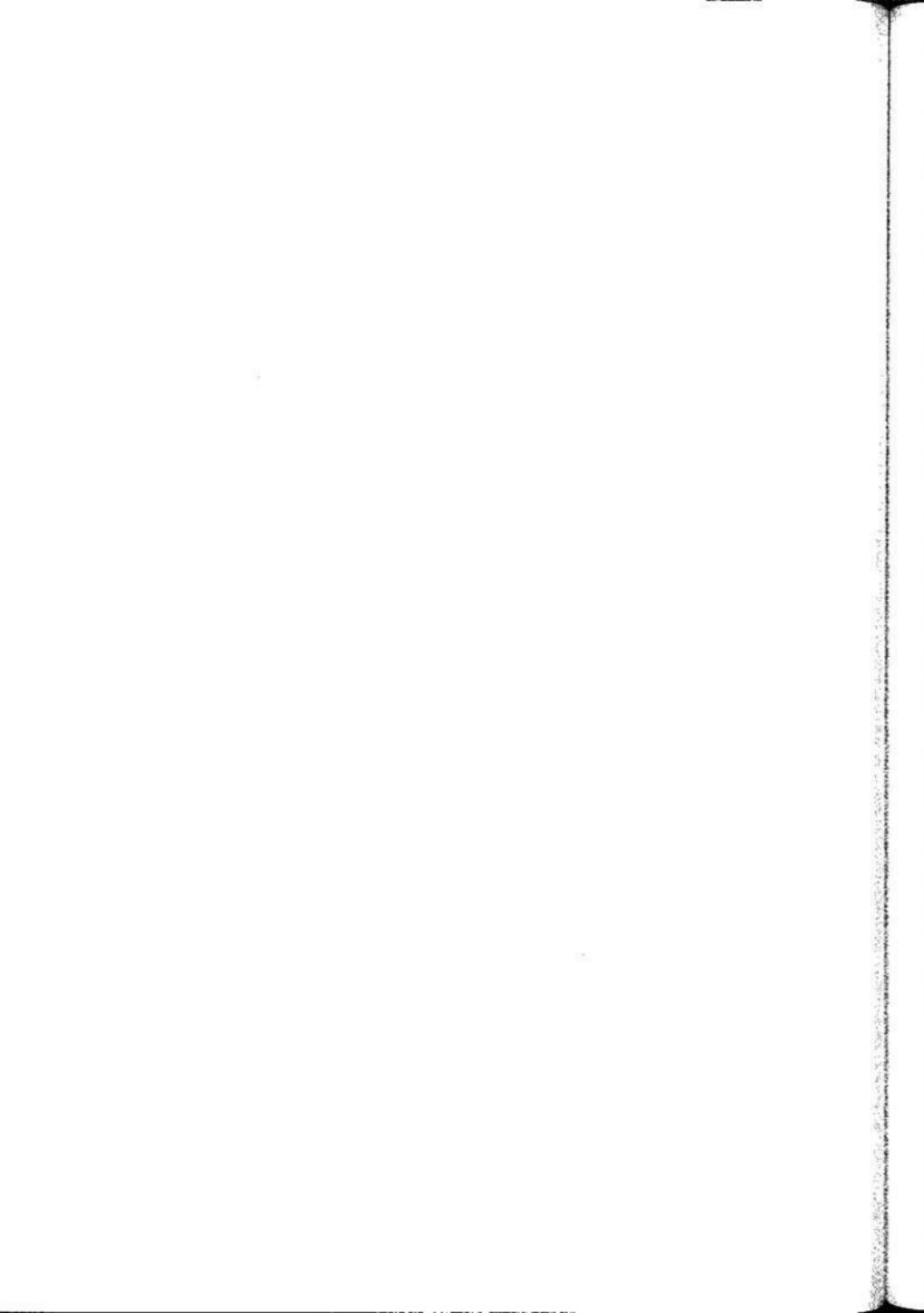
## 引用文献

渡辺正巳(2000)長原遺跡東北地区東調査地出土木質遺物の樹種鑑定.長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ-1997年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書-,247-249,財團法人大阪市文化財協会.

# 図版



上阿宮Ⅲ遺跡 遠景（遠方は城平山）





上阿宮 I 遺跡第 1 調査区  
調査前全景（西より）



完掘状況（南より）



上阿宮 I 遺跡第 2 調査区  
調査前全景（東より）

図版2



完掘状況（南より）



上阿宮Ⅲ遺跡第1調査区  
調査前全景（西より）



完掘状況（西より）



上阿官Ⅲ遺跡第2調査区 完掘状況

図版4



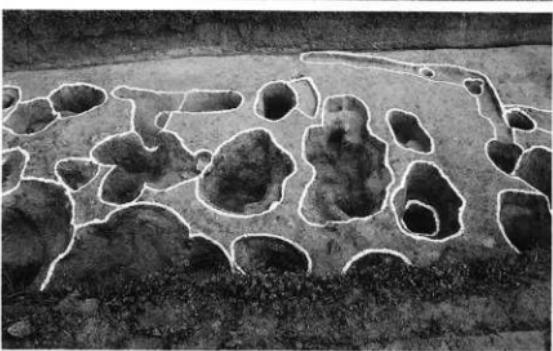
遺構検出状況（西より）



遺構検出状況（東より）



SB01、SB02完掘状況



SB04完掘状況

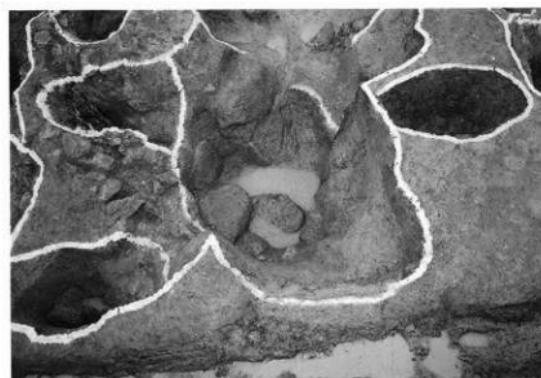


SB05完掘状況

圖版 6



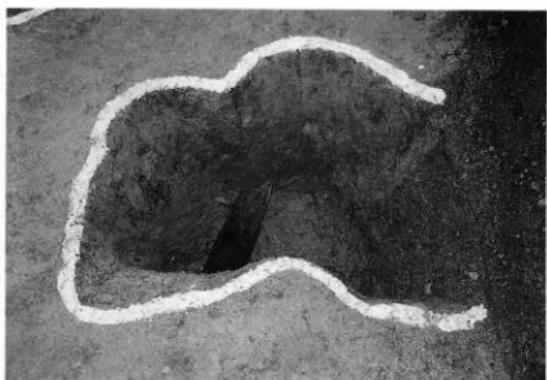
SB01・P2 柱穴断面



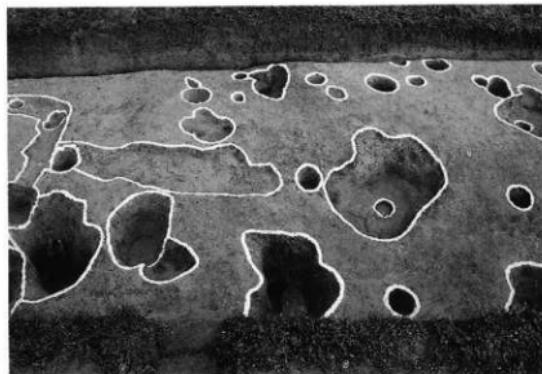
SB01・P4 柱穴壁板検出状況



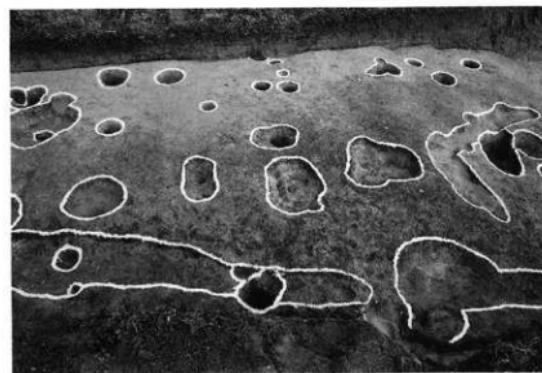
SB03・P2 柱穴壁板検出状況



図版 8



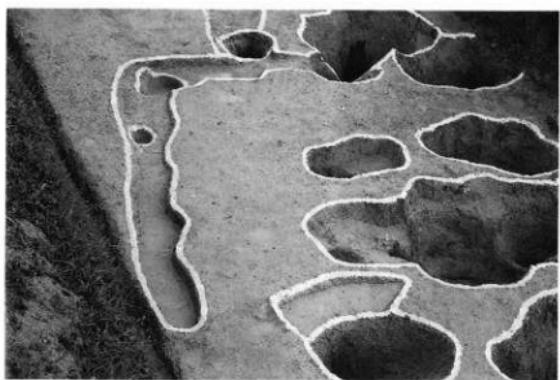
SA01完掘状況



SA02完掘状況



SA03完掘状況



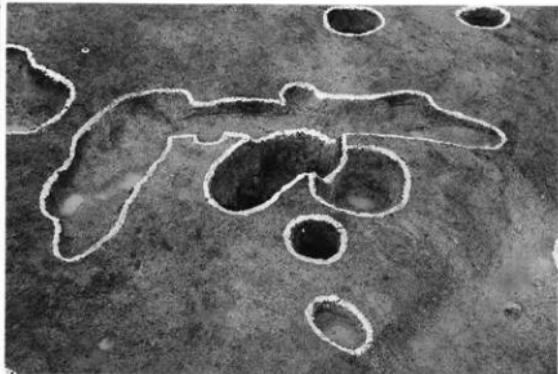
SD01完掘状況



SD06完掘状況



SD02~SD04完掘状況



SD05完掘状況

図版10



T1



T2



T3



T3 底部



T4



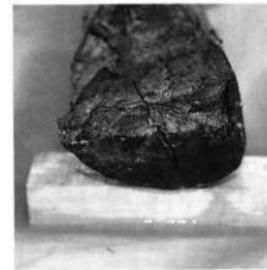
T5



T6



T7



T7 底部

図版11



T8



T10 底部



T11

T12

T13



T14



T15



T16

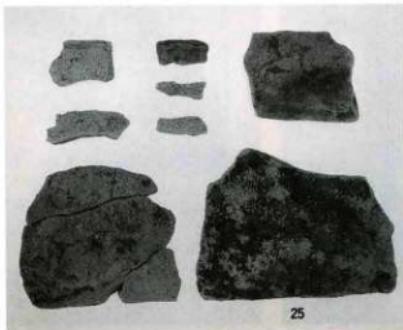
图版12



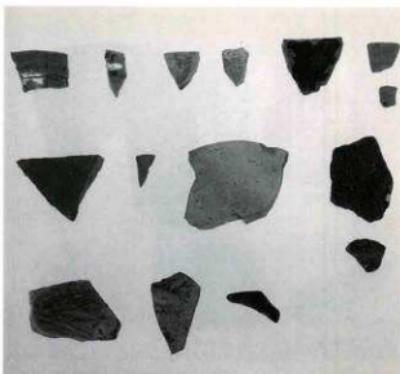
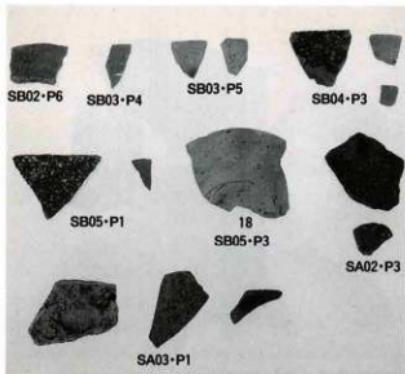
SB01 · P3 出土遗物 (青磁·白磁·肥前系陶器·漳州窑系磁器)



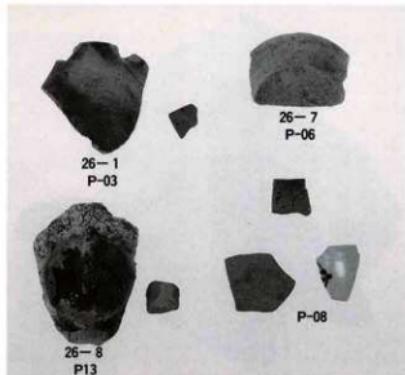
SB01 · P4 出土遗物 (土师质土器·肥前系陶器·漳州窑系磁器)



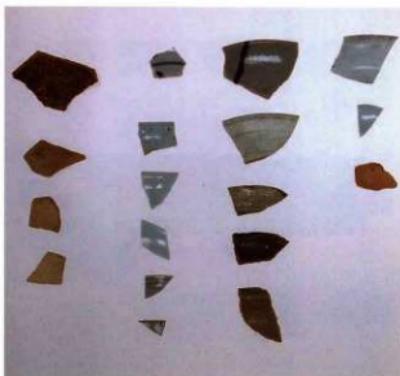
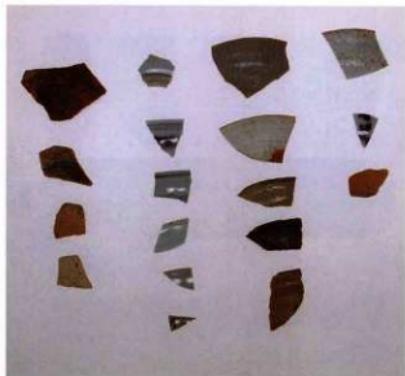
SD06出土遗物 (罐)



遺構に伴う出土遺物①（須恵器・土師器・土師質土器・青磁）

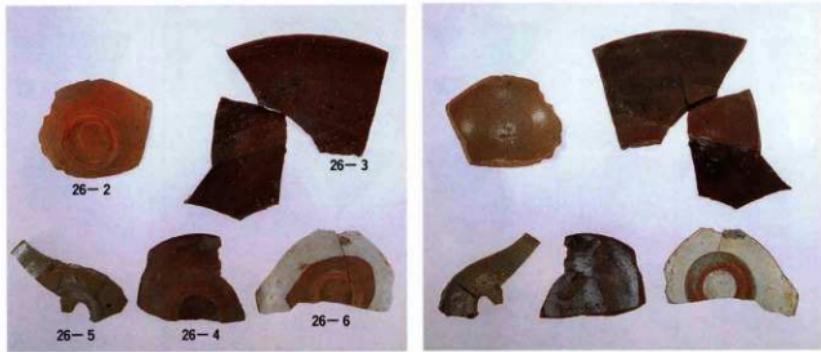


遺構に伴う出土遺物②（土師質土器・白磁・青花）



遺構に伴う出土遺物③（P-07 土師質土器・青花・肥前系陶磁器）

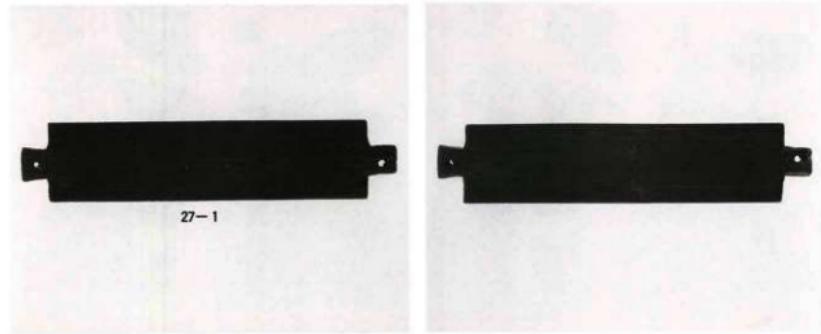
図版14



遺構に伴う出土遺物④ (P-04 備前系陶器・肥前系陶器)



遺構に伴う出土遺物⑤ (P-08 木製漆塗椀)



遺構に伴う出土遺物⑥ (P-07 札状木製品)



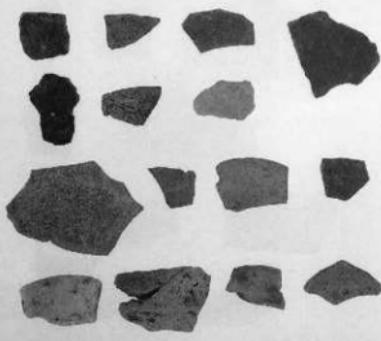
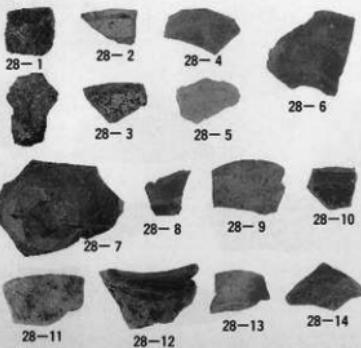
遺構に伴う出土遺物⑦ (P-07 扱手)



27-3



遺構に伴う出土遺物⑧ (P-07 板状木製品)



遺構に伴わない出土遺物① (弥生土器・須恵器・土師器・土師質土器)

図版16



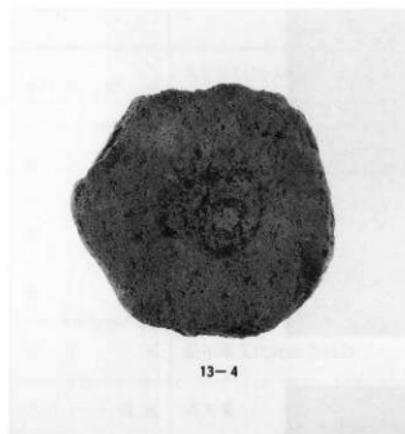
遺構に伴わない出土遺物②(肥前系磁器)



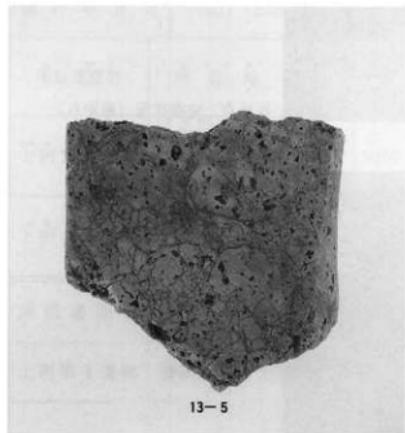
遺構に伴わない出土遺物③(肥前系陶器)



遺構に伴わない出土遺物④(瓷器系陶器・常滑系陶器・備前系陶器)



SB01・P4 出土遺物（円盤状石製品）



SB01・P4 出土遺物（砥石）

図版18



A地点 完掘状況（南から）



B地点 完掘状況（南から）



C地点 完掘状況（西から）

## 報告書抄録

ふりがな	あぐちくけいえいたいいくせいきばんせいびじぎょうにともなう かみあぐいせき・かみあぐ 三いせきはくつちょうさほうこくしょ
書名	阿宮地区経営体育成基盤整備事業に伴う上阿宮Ⅰ遺跡・上阿宮Ⅲ遺跡発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ	斐川町文化財調査報告
シリーズ番号	第30集
編著者	宍道年弘
発行機関	鳥根県教育委員会
所在地	〒699-0592 鳥根県簸川郡斐川町大字莊原町2172 Tel.0853-73-9190
発行年月日	平成17(2005)年3月10日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上阿宮Ⅰ遺跡	鳥根県簸川郡斐川町大字阿宮384番地2他	32401	Y199	35度20分31秒	132度51分39秒	20040603～20050310	32m <sup>2</sup>	ほ場整備 (道路敷地)
上阿宮Ⅲ遺跡	鳥根県簸川郡斐川町大字阿宮262番地1他			35度20分39秒	132度51分24秒	20040603～20050310	222m <sup>2</sup>	ほ場整備 (道路敷地)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上阿宮Ⅰ遺跡	集落遺跡	古代～近世			
上阿宮Ⅲ遺跡	集落遺跡	古代～近世	掘立柱建物5 横列状遺構3 溝状遺構6 柱穴群	弥生土器、須恵器、七輪器 上師質土器、白磁、青磁 青花、瀬州窯系磁器 壺器系陶器、備前系陶器 常滑系陶器、肥前系陶磁器	古墳時代の横列状遺構、溝状遺構 戰国期～江戸初期の 掘立柱建物

斐川町文化財調査報告書 第30集  
阿宮地区経営体育成基盤整備事業に伴う  
**上阿宮Ⅰ遺跡・上阿宮Ⅲ遺跡発掘調査報告書**

2005年3月10日発行

編集・発行 斐川町教育委員会

〒699 0592

鳥取県斐川郡斐川町大字庄原町2172

TEL 0853-73-9190

印刷・製本 株式会社 楽 光 社